
THE LAST WIZARD -アスタリスク-

真木 葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

THE LAST WIZARD ―アスタリスク―

【Nコード】

N7341L

【作者名】

真木 葵

【あらすじ】

連載小説「THE LAST WIZARD 一月下、再び」「THE LAST WIZARD―Another KID―」の続編にあたります。

高校生でありながら一人のマジシャンとして活躍する快斗の元に一通のファンレターが届いたのだが、封筒に隠されたあるメッセージを新一が見つけてしまい…

1（前書き）

はじめに

＊実際の地名とは異なります、同名の施設があっても無関係です。
＊児童養護施設に関する事柄も法律の知識もほぼ適当です。

十一月上旬、本格的な冬の寒さはこれからだと言わんばかりに冷気を帯びた乾いた空気が凍える頬に浸透する。学校帰りに行き成り幼馴染の能天気少女に腕を引かれる様に連れてこられたのは、何とも同世代の少女に人気がありそうな真新しいカフェレストランだった。

さつきからずっと幼馴染の少女がそのレストランについて何やら自慢げに情報公開していたのだが、そういったオシャレな場所には全くと言って良い程に興味がない。飯なら安くて旨い物で十分、ったくこれだから女って奴は…と半ば呆れながら、それでも仕方なしに付いてきてしまう自分に苦笑しながら、大人しくついてきたというワケだった。

「いらっしやいませ」

若い男性のウェイター越しに見える店内は、青子が言っていた通り感じのよさそうな雰囲気醸し出していた。それ程混雑はしていなそうだったけれど、それでも若い世代のお客さんの姿がちらほらと見える。英国風の調度品に、まだ夕方だと言うのに少しかだけ薄暗い照明にセッティングされている。

「（あの男どもが好みそうな店だな）」

と、脳裏に過るホームズフリークな探偵が二名。決して馬鹿にしているワケではなかったが、二人揃って世の探偵たちのレベルから抜きん出た少年だった。しかも一人はクラスメートで早々に正体を知られた男であり、そしてもう一人は互いの命運をかけて共同戦線を布いた仲だ。認めたくはなかったがお互いに自分たちの力量を信じあった仲と言っている。

稀代のマジシャンの才を受け継いだ少年、黒羽快斗が扮する月下の奇術師を追い詰めたのは、この二人以外に居なかった。宿敵であ

りながら快斗の正体を公開しようとしないうまま、快斗は奇術師の伝説に静かに幕を下ろした。…全てが終わったのだったから、去年の12月に。

「すみません、友人と待ち合わせしているんですが」

「かしこまりました、どうぞ」

そう言って快斗を置いて店内と進む青子の後を追う。…友人と待ち合わせ？聞いてないぞ…。

「青子、オメー誰と待ち合わせしてるんだ？」

「ええ、快斗何寝ぼけてるのー？青子はちゃんと聞いたよー？」

振り向かずに店内をキョロキョロと見回りながらそう言い放つ青子だった。快斗は必死に今日の青子との会話の全部を思い出そうとするのだが、放課後付き合ってたね以外に何も言われていない筈だった。確かに最近は怪盗家業も無くなり学校での居眠りも減ってきた方だったのだが、いかんせん快斗の席は窓際で昼寝には持ってた来いの日当たりだ。授業を終えて話しかけられれば、寝ぼけていた可能性もある。

「あ、居た居た！」

セーラー服の裾を翻しながら小走りで店の一角へと進む。四人がけの席で向かい合ってた座っていた同年代の少年と少女が、青子に向かって片手をあげていた。

「（…何だ、あいつか）」

小さな溜息と一緒に青子の傍まで来ると、久しぶりに逢うその二人が快斗にも笑みをかけた。青いブレザーの帝丹高校の制服姿で、片や日本警察の救世主とまで言われたかつての快斗の天敵。世間じや有名人と一緒に歩いていると少年の噂話がそこかしこで始まる位だ。

同席している少女も同じだ、肩書きだけで言えば少年程有名なワケではないのだがかつて眠りの小五郎と称された名探偵の娘でありかなりの美人。自分の幼馴染の青子と顔立ちが似ていたのだが、何

故か青子の方が歳下に見える。快斗にとっては幼げな青子の事が本当に愛おしい少女だったが、お互いに素直になれずに幼馴染と言う関係に甘んじて、まだまだ恋だ愛だと言う進展は見受けられないままだった。

「ごめんね遅くなっちゃった」

「ううん、私たちも今さっき着いた所よ」

青子はコートを脱いで蘭の横に座った。女の子同士仲が良いのは微笑ましいのだが、この男の隣に座るのかよとちょっと嫌そうな雰囲気を感じずに、快斗は渋々新一の横に腰かけた。お互いの思考はかなりの確率で言い当てられる関係だったから、新一は思わず苦笑する。

もう今さら捕まえたり等はしないと解りきっている筈なのに、本来のお互いの素性が「隣に居る」事に違和感を感じていたりもした。まるで同じ極を向けられた磁石の様に。

「はい青子ちゃん、メニュー」

「ありがとう！何にしようかなあ」

そんな心を知ってか知らずか、青子は相変わらずだった。新一と蘭は既に注文してあったコーヒーで冷えた身体があったまっている様子だった。

「快斗どれにするー？」

そう言ってメニューの一番後ろ、デザートの写真が並んだページを向けられた。こういう場所に来れば青子も快斗も二人揃って甘い物を注文するのはいつもの事。子供の頃から何も変わらない当り前の風習なのだが、まるで可愛らしい歳下のカップルを見る様な仕草で見守っている蘭と新一の視線に気づかない快斗ではなかった。

「青子はイチゴパフェにしようかなあー、快斗はねえ、コレなんかどう？チョコ好きだもんねー！」

蘭はクスクスと笑いながら、横から「どれも美味しそうね」と話しかけている。新一は少しだけ意地悪な視線で快斗を見ていた。何

も言いそうもなかったのだが、それが「チョコ好きだもんねー」と青子の口調を真似してからかっている物だという事は聞かなくても解る。

青子が居なければ大体いつもの快斗の性格のままで新一とは一緒に居たが、どうもそこに青子加わると調子が狂う。自分で無意識のウチに格好つけたいのか、普段通りといかなかった。

「いいよ、何でも」

少しだけ不貞腐れてみたが青子は早急にウェイターを呼んで注文してしまう。メニューを返して自分たちの分の水がテーブルにおかれて、ようやく今日の集まりの目的の話が始まろうとした。

「夏休みの黒羽君のマジックショーと一緒に誘って貰った服部君と和葉ちゃん。あの二人が、年末に是非大阪に遊びに来ないかって言ってるの」

「へ？オレたちもか？」

工藤新一に対して西の名探偵と言われている服部平次とは、キッドの際に何度か逢った事があったのだが、黒羽快斗として逢ったのは今年の夏のマジックショーで初めて逢った時だった。彼の幼馴染である和葉と共に一緒に快斗の楽屋に挨拶に来てくれた。

「けど黒羽、お前の予定が何か色々ありそうだって青子ちゃんから聞いてな、面倒くせえから逢おうって話になったんだよ」

旅行の計画となればただの学生である蘭や青子は、学校さえ休みなら何とでもなる。警視庁の目暮警部からほぼ週2〜3の勢いで呼び出しを受けている新一も、何もそれが仕事と言うワケではないのだからいくらでも融通は利くのだが、快斗に至ってはそういうワケにも行かなかった。

ショー以外でも奇術師として活躍している快斗は、本人にその自覚がないとしても今やメディアも注目するエンターティナーだ。怪盗をやった頃に比べる程でもないとはいえ、亡き父の後を追う天才マジシャンとして世間も期待しているワケだ。

「って言われてもまだまだ駆け出しのマジシャンだぜ？いくら何でも冬休み全部予定が埋まる程じゃねえんだから、勝手に決めてくれないけど」

ましてや快斗だって冬休みや年末年始はゆっくりしたいと言うのが本音だった。いつも人の予定お構いなしに計画を立てるお祭り女が幼馴染だったから、基本的にはいつ誘われても大丈夫ように考えている。手帳等持ち歩いて居なかったが、それでも彼のIQは測定ミスじゃないかと疑われる程に馬鹿高い。

「けどクリスマス付近は色々忙しいんだろう？」

「あー、その辺はね。26日以降からならある程度ずらせる予定しか入ってないから、構わないけど」

大きなショーが終わってしまえば何とでもなるかな、と告げると、カバンから水色の可愛い手帳とペンを取り出して、カレンダーに何かを書き込んでいる青子が楽しげに微笑んでいた。毎日学校に通って帰るだけの日々だと言うのに、彼女の手帳のカレンダーには文字がびっしり書き込まれている。

「じゃあ和葉ちゃんにもそうメールしとくね」

「まあ、任せるよ」

別段楽しみでも何でも無さそうな返答だったが、それもいつもの事だ。頭の中では無駄知識として貯蓄されている大阪名物の店のリストを広げていた。

青子と快斗が注文したパフェが届く。カフェテラスでは少し風が出て来たのか、店の飾りの旗が波打つように風に曝されていた。青子は蘭にもどうぞと言ってパフェを分けていた。元より甘い物があり好きではない新一は、ぼんやりと外の景色を眺めている。

何処かで遊んでいた帰りなのか、ランドセルを背負った子供たちが信号待ちをしている後ろ姿を、何処か懐かしそうに見つめていた。何を思っているのか、新一の小学一年生時代を知る快斗は察しがついていた。…それは勿論新一の本来の小学一年生の姿ではなくて、

高校二年の時に組織に飲まされた毒薬の副作用で子供の姿になってしまった時の話だった。

最初に出逢った時、ただの子供とは到底思えない鋭い慧眼。まさかとは思いきや、魔女の知り合いが居る快斗にとつては例えどんなに信じられない不可思議だったとしても、真実をそのまま受け止める事が出来る。：身体が縮んでしまったと言う、未知なる現象を。

無事に解放されたとは言え、江戸川コナンだったと言う事実は、新一にとつて何とも言い難い“過去”だった。思い出のページにしまいきるには少しばかり異質な“過去”。

けれどそんな新一の所在なさげな視線に気がついた蘭が、心配そうに彼を見遣る。快斗はテーブル下で気がつかれない様に新一の足を蹴飛ばす。悪戯でもなさそうな小さな合図に「何だ？」と新一が視線を戻すと、蘭が自分を心配している様子に気がついた。

「蘭も頼めば？」

「え…？」

「そうだよ、蘭ちゃんコレ美味しそうだよ！」

「アホ子…オメーが食いたいただけだろ」

胸中で快斗に「サンキュ」と告げて、徐に青子が食べたがっていた別のデザートの話に加わった。快斗と青子は口を開けば喧嘩腰。この四人で居る事が今では不思議と心地よかった。新一も快斗も、ようやく普通の生活に戻れた何よりの証拠だったから。

「黒羽、お前何か落ちそうだぞ？」

「へ？」

デザートのサ克蘭ボを青子と取り合いしていた快斗の制服のポケットから、何やら封筒らしき頭が出ているのを新一が見つけた。顎で「それ」と指されて「ああ、これか」と左手でポケットから取り出した。いつの間にか取り合っていた筈のサ克蘭ボは青子のグラスの中に沈んでいた。

「今朝学校行く時に母さんに渡されたんだ、すっかり忘れてた」

「うそっ！快斗にファンレター！？」

何故か嬉々としてテーブルに身を乗り出す青子だったが、何故嬉しそうなのかはいまいち把握出来ない三人だった。幼馴染が有名になるのが嬉しいのだろうけれど、快斗が青子に特別な想いを抱いている事等、二人は聞かなくとも解る話だったから。：新一と蘭の二人から少しだけ同情の気持ちを寄せられている事に、僅かながら鬱陶しさを感じた。

「違げーよ…えっと…福島？」

宛名は随分と大きな字で書かれていた。誰が見ても解る、それはまだ習っていない漢字で書いた事もなさそうな子供の字。所々に誤字があつたが、住所としては成り立つ程度の誤字。

「誰からだ？」

「城川市の相模学園としか書いてねーな」

乱雑に書かれた文字を見て、快斗はいつの間にか右手の指先に定規を取り出した。

「城川市って、どの辺だっけ？」

「確か山間の小さな町だったと思うわ、私のお母さんの知り合いの弁護士さんが住んでて、子供の頃に連れてってもらった事があるのよ」

蘭と青子の会話を聞きながら、快斗は定規で器用に封筒の頭を切ると、中に入っている便箋を取り出した。縦書きの便せんで、広げるとそこには一枚の写真が一緒に入っていた。

何処か古びた校舎を前に、数人の子供たちが身を寄せて撮った一枚の写真。錆びた鉄棒と遠くの山々が美しく映える青空。わんぱくな子供たちの笑い声が今にも聞こえてきそうな感じを受けた。

「マジシャンの黒羽快斗さまへ」

広げた便箋を青子がそっと読み上げた。

「僕たちは相模学園で暮らしています。この間TVでマジックをしてるカッコイイ黒羽快斗さんを見てすご感動しました。ぜひ僕

たちにマジックを教えてください！」

所々ひらがなで子供特有の字のバラ付きを見せるその便箋を快斗に手渡した。青子から受け取ったその二枚目の便箋をめくると、少しだけ年上らしき子供が書いた様な続きがあった。

そこには相模学園がどういう所だかと言う説明から始まっていた。身寄りのない子供たちが集まる児童養護施設だと言う事が見受けられた。近くの小学校に通っている子供達だったが、両親の居る子供達とはいまいち馴染む事が出来ずに、時折喧嘩やいじめすら存在していると書いてあった。

だけど皆快斗のマジックを見てとても感動した、普段話をしない子供たちが一緒になって楽しんだ。だから僕たちにも教えて欲しいと、そう書かれている。

「行こうよ快斗！子供達に教えてあげよう！」

「あのなあアホ子、マジック何て子供がホイホイ出来るもんじゃねえんだよ」

「でも快斗だっておじさんから教わってやってたじゃない、子供の頃に」

この手の話になると正義感だか同情だかが胸一杯に溢れる幼馴染は、自分の事のように燃え始めてしまっしょうがない。何も行かないとは言わないが…。

「マジックを見せに行つてあげるだけでも喜ぶんじゃないかしら？黒羽くんのおおのがかりなショーじゃなくても、子供達に生で見せてあげられれば、きっと大喜びよ」

快斗はほぼオールマイティーにこなせるマジシャンだった。テールマジックからステージマジックまで、彼の指先が魅せる奇術はまさに二つ名の通り“魔術師”を連想させる程の実力だ。

「まあ…別にオレは構わねーけどよ」

「ちよっとー！何で蘭ちゃんの言う事だと素直に聞くのよ！」

「…あ、あのなあ…」

三度快斗と青子の口喧嘩が始まろうとしていると、新一はテーブルの上の封筒に目を落とした。この二人の喧嘩でコップが倒れてしまっただけは困るだろうと思い、便箋と写真を取ると封筒にしまう。けれど白い封筒の中を広げた際に、丁度切手の裏側にあたる位置に何やら反転させた文字を見つけて手が止まる。

「新一、どうしたの？」

「いや：コレさ：」

そう言って封筒の宛名の左上に貼られた切手の端に爪を引っ掛けた。綺麗に端まで糊づけされていなかったから、親指と人差し指で引っ張ると簡単に剥がれた。

「ちよっと、どういう事：？」

蘭と青子も覗き込んだ。切手を剥がすとそこには赤いペンで『たすけて』とだけ書かれていた。明らかに子供の字で。

快斗は写真を見つめた。幸せそうに微笑む子供達の身に何か起きているのだろうか。

「黒羽」

「ああ：」

解ってる、放っては置けない：そう呟いた。



平日の朝の慌ただしさが全く感じられない三連休第一日目の朝、家から五度目くらいの大あくびを隠しもせずに気怠るそうに付きながら青子の歩調に合わせて隣を歩いていた。既に慣れっこだからか、それとも小旅行気分で楽しいから気にしないのか、青子は二泊分の荷物すら軽そうに手に持ちニコニコと笑みが絶えなかった。

「久しぶりだね、快斗と旅行するの」

「：そーか？」

面倒くさそうに受け答えしつつも、心の中じゃ付いて来る事になった例の二人さえ居なければ少しは楽しいんだろうけどなあと思

やり独白していた。

「封筒の“あの事”は確かに結構気がかり何だけど、のんびり電車で揺られて遠い所行くのもたまにはいいよね：最近快斗、ずっと忙しいみたいだったから」

コートのポケットに両手をつっ込んだまま、一瞬青子の言葉に足が止まった。自分の顔を窺う様にこっちを見ている青子が、遠まわしに「さびしかった」と伝えている様に感じられた。

怪盗をやっていた頃も確かに夜通し飛び回って居たから、学校では居眠りばかり：下見があるから放課後も週末も殆ど青子と遊んで居なかった。：念願のマジシャンとして華々しくデビューを飾ってみれば、学生である事にも多少疲労を感じる位に忙しくなっていた。

快斗のマジックが誰よりも大好きな青子だったから、あまり逢えなくなっても学校で逢えるから何も言わなかった。むしろ祝福していた。けれど、本音を言えばもう少し快斗と一緒に居たい筈だと、自信過剰と言われようが何と言われようが、幼馴染の自分が良く解って居る事だった。

「：オメー、クリスマス絶対空けておけよ」

「えっ？」

「“え？”じゃねーよ。米花ホールでやるマジックショー、特等席用意してやつから」

そんな約束等いちいち交わさなくても青子が来るに決まって居た。チケット何か無くても、何処でもフリーパスで入れる。快斗にとっては家族同然。

わざわざそう告げると、青子は目を瞠って驚いていた様子だったが、ふいに快斗に右腕を掴まれた。いつの間にか青になって居た横断歩道の信号。少し照れているのだろうか、早歩きで駅へと向かう。

「うん！約束だよ！」

「おうよ」

恋人ではないけれどただの幼馴染じゃない、快斗と青子はお互いに相手は特別な存在だから。まだ開店していない商店街を過ぎて、

いつもの歩き慣れた駅前へと二人は進んだ。

待ち合わせ場所はロータリーのベンチだ。青子はベンチに荷物を置いた。流石休日と言う事もあって、平日の混雑は全く見受けられなかった。徐に携帯を出して時間を確認すると、約束の8時半に針が到達しようとしている。

あの二人の事だからそろそろ来るんじゃないかなあと青子が話しかけようとする…

「マジかよ…」

「どしたの？快斗」

タクシーの止まっているロータリー入口から一台入ってきた、限りなく黒に近いダークグレーのボディ。あまり車には詳しくない快斗だったがそれがイタリアの自動車メーカー、アルファ・ロメオ社のクーペ型自動車“アルファロメオ・GT”だという事は解った。視力の良い快斗はその車の右側の運転席でハンドルを握る少年を見た。紛れもなく待ち合わせ相手だと言う事に気がつく。助手席には当然、少年の幼馴染の少女の姿。

向こうも快斗達に気がついた様で、そのままロータリーを回りベッチの目の前に停車する。突然の事で何が何だかよくわからなかった青子だったが、助手席から降りて来た蘭の姿を見て驚愕した。

「おはよう、青子ちゃん、黒羽くん」

「らっ！蘭ちゃん!？」

車に走り寄る、助手席のドアから中を覗くと運転席には確かに新一の姿。それが外国の車だと言う事も何も解らない青子だったが、見るからに他車とデザインの違うそれに思わず呆けてしまう。

「新一、後あけて」

「ああ」

快斗は溜息すら付きながら、ベンチに置きっぱなしの青子の荷物を持ち上げて車に近づいた。車のトランクに投げ入れるように二人

分の荷物をしまう。そのまま遠慮なしに助手席を前に倒してリアシートに乗り込むと、青子も「お邪魔します」と続いて乗り込んだ。

「ごめんね青子ちゃん、後ろの席ちょっと狭いでしょう」

「ううん！大丈夫！でもビックリしちゃった、工藤クンで車の免許持ってたんだね！」

蘭の座る助手席と運転席の間から顔を覗かせてはしゃいでいる青子は、新一が今年の夏休みに車の免許を取っている事を知らなかった様子だった。ましてや今日は電車で行くつもりでいたのだから余計に驚きだった。

「免許っつーか車だろ、高校生が何外車なんか乗ってんだよ…」

「バ快斗。俺のじゃねーよ、母さんのだよ」

そう言ってミラーを確認し、ブレーキペダルから足を放す。同い年の男の子が車を運転している姿があまりにも新鮮で、青子は新一に釘付けだ。：それがただの物珍しさからだという事は承知して居ても、当然快斗にとっては面白くも何ともない。

「青子ちゃん達、朝ごはんは食べて来た？」

「うん、食べて来たよ」

「じゃあとりあえず首都高抜けて東北自動車道向かうか」

蘭が新一から渡されていたらしき、カーナビの液晶パネルをダッシュボードの上に立てかけた。

とても免許を取ったばかりの高校生とは思えない運転技術だったが、元々物好きな父親からクルーザーやヘリコプターの操縦、はたまた拳銃の扱い方さえ教わっていた探偵だ。ハンドルを握るのも初めてというワケではなさそうだった。

かく言う快斗も免許自体は持って居なかったが車・ヘリ・バイクとある程度の知識と技術を兼ね備えている。ただそれはあくまで怪盗家業で必要だった物であり、明るみには出来ない事実でもあった。「お前一人で大丈夫なワケ？運転変われって言ったってオレ免許ないよ」

「ああ大丈夫。目暮警部に呼び出されて、もう結構な距離走ってるからな」

「けど流石に福島は遠いだろう…」

運転席越しに見えるフロントガラスの向こうを見ながらそう話す。都会の道は車線数も多いし、交通量も半端ない。高速に乗ってしまえば楽にはなるだろうが、それと言っても免許取って2、3ヶ月の初心者ばかりのように思えると快斗は心配している様子だった。

「ま、いざとなったらお前一人で“飛んで”行けばいいじゃん」

「テメツ」

リアシートから乗り出して運転中の新一の首を締めようと手を伸ばす。ルームミラーに映っている新一はケラケラ笑っていたが、正体をバラすような発言をされて抗議しようとするが…

「そうね、黒羽くんなら空くらい飛べそうよね」

「やだー、工藤クンも蘭ちゃんも！そんなコト言ったら快斗意地になっちゃうからダメだよー！」

当然怪盗の正体を知らない二人にしてみれば、新一の冗談だとか捉えていない。むきになって否定する方が返って怪しく思われる。新一がミラー越しに快斗を見て「ほらな？」と視線で合図している。

「んじゃ首都高乗るからシートベルトして、大人しくしてろ」

「はぁーい！」

青子は楽しそうに返事をして、ベルトをはめた。同学年の友人だけでこうしてドライブがてらの小旅行と言うのは当然初めてだったから、青子が嬉しそうにしているのが良く解る。快斗も「後で覚えてろよ」とでも言いたげな視線で新一をミラー越しに睨むと大人しくベルトをはめた。

『まあ、たまにはいいか』

本音を言えば一人で行くつもりだった。あの時、もう少し早めに母から受け取った封筒を開けて居れば、青子すら誘わずに一人で行こうと思っていた。

昔の癖か性格かは自分でも良く解っていなかったけれど、念入りに下見と情報収集してから行くのがいつもの快斗のスタイルだったのだが、まあ新一は言わずも知れた名探偵、蘭に至ってはずば抜けた運動神経の上に巨躯の男すら敵わない空手の腕前。

連れて行っても問題はないだろうし、どちらかと言うと頼りになる。ただいつも単独行動で来た快斗だったから今一慣れ親しめない状況なだけ。

『子供の悪戯って可能性も高いしな』

出来ればそうであって欲しい。

リアシートの窓から見える、いつも眼下に見ていたこの都会の景色をぼんやりながめながら、車の振動が誘う催眠作用に、いつの間にかうとうとしはじめていた。

都心の渋滞をようやく抜け、東北自動車道をそのまま北へと向かう。お昼に立ち寄ったSAを出て再び車を走らせる事1時間。賑やかだった車内の会話も段々と減っていき、新一は飲みかけの缶コーヒーに手を伸ばした。

「もうぬるくなっちゃったでしょう、次で寄ってくれたら新しいの買ってくるよ」

「蘭、起きたのか」

少しだけ傾けていたシートを元の位置に戻して、窓の外へと視線を馳せる。

「今どの辺？」

「そろそろ宇都宮かな」

「少し休憩する？」

「那須塩原辺りまで走るよ、青子ちゃんが那須高原寄りたいって言うってたしね」

顎でルームミラーを指すと、蘭がそつと後ろを覗いた。お互いに身を凭れかけさせて仲良くうとうとしている様だった。二人に面影が似ているせいか、まるで昔の新一と蘭の様にも見えるから何となく気恥ずかしくなる。

「二人とも何だか可愛いわね」

「・・・黒羽が聞いたら怒りそうだな」

これが自宅なら毛布でもかけてやりたくなるんだろうな、と二人で笑っていた。快斗の正体を知っていた新一ですら、普段の快斗と怪盗のギャップの差の激しさには最初は戸惑いすら感じた位。これじゃあどんなに証拠があっても同一人物だとは到底思えないだろうな、と。

「青子ちゃんね、以前、黒羽君が有名になるのは凄く嬉しいけど、何だか時々ちよつと複雑な変な気持ちになるって零してたのよね」

後ろの二人を起こさないように、小さな声で蘭は新一だけに告げた。フロントガラスの向こうから視線を外さずに、新一も蘭の言葉に耳を傾ける。

「どんなに有名になったって、アイツは変わらないと思うけどな、俺は」

「違うわよ新一、変わるのとは黒羽君じゃなくて」

カーナビは真っ直ぐ進路を指している。法定速度を少しだけオーバーして、周囲の車の波に乗りながら、ゆっくりとハンドルを微調整する。

「：少しか青子ちゃんが言いたい気持ち解るの。私も、幼馴染みが新聞載ったりマスコミに注目されたりして、やっぱり複雑だったもの」

「蘭…」

小さい頃から父親の影響か、探偵を目指すと豪語していた幼馴染み。言っていた通り彼は警察の手に負えない難事件を解決し、見事新聞の一面を飾っていた。そうなれば当然一緒に歩いていけば注目されるし、日本中からファンレターが届く。まるで芸能人にでもなったかの勢いで周囲がその本人を見る目さがらっと変わってしまった、一番近くに居た人間にとっては距離（溝）が出来てしまうように思えてしまうのだ。

「あ、あのさ、だから…」

「でも今は大丈夫。新一がずっと居なかった時に比べれば全然マシだわ」

そっと視線を助手席に見遣ると、いつもの蘭の笑顔がある。コナシだった時には見上げるしかなかった彼女の横顔を、今は対等の位置で見つめる事が出来た。

「ほんと全然帰ってこないんだもの、大変だったんだからね？学校のみんなからもマスコミの人からも『工藤新一は何処へ行ったんですか！』って聞かれて。：私は新一のマネージャーでも何でもないですってどれだけ大声で言いたかったか」

「あ、はは、あ、そゆことね…」

少しだけ膨れて見せる蘭。返事に戸惑っていると雰囲気のない言葉を言われて、乾いた笑いしかでない。上手くフォローを入れたかったけれど、なかなかまだ自分の気持ちには素直になれないで居る。あの頃と何も変わってない自分たちに、快斗達の事は言えないなあ。胸中で溜息付きながら、それでも蘭と新一は昔よりも少しだけ距離が近づいた様にお互い思っている。隣に居て欲しい人は、ずっと変わらないのだ。

「ねえ新一、黒羽君それとなく焚き付けといてよ」

「あのなあ…出来るワケねーだろうが」

「どうして？ 新一、仲良いじゃない」

「…何処をどうすれば俺と黒羽が仲良いって思えるんだよ…」

今でこそ蘭と青子が友達になったから新一と快斗がそれに付き合わせられる形で一緒に居るが、それがなければ本来あんまり一緒に居ない筈だったのだ。確かに一時は二人共に戦った仲である、それは蘭も青子も全く知らない事実だったのだ。

蓋をあけてみれば快斗のお茶目な性格と新一の真面目な性格という物があんまり合わない物だと、お互いに自覚していた。あくまでただの顔見知り程度の友人であって、そんな風に“仲良し”だと思われる程、二人は一緒に居るワケではなかった。

「園子も言ってたよ？ 新一と黒羽君って、何かお互いの秘密を共有している様な妖しい雰囲気を出しているから危ないって！」

ピンポイントな読みに思わず“寝た振り”をしている快斗ですら、吹き出しそうになった。ハンドルを握っている新一も、頭部に微痛を覚える。…この場合、園子の読みがどういう意味をさしているのか考えれば、男二人は寒気すら感じてしまう。

「まあとりあえず、俺が黒羽を焚き付ければ“何て言い返すか”なら解ってるけどな」

「確かに“余計なお世話だ”って言いそうね」

「…だろ？」

正確には蘭の推理は外れ。けれどそれを言ってしまうえば「何なの？」と問われる事は火を見るよりも明らかなので同意した。“お前はどうかんだよ” って言い返されるとは蘭には言えない。

と、苦笑しながらルームミラーで快斗を見遣ると、確かに瞳は閉じていたが何処となく彼の意識が窓の外に向いている気配を感じ取った。そして耳を澄ませて二人の会話に聞き入っている事に。

「でも黒羽の事はどうでもいいとして、青子ちゃんがそんなに寂しい思いをしているっていうんだったら確かに可哀相って言えば可哀相だよなあ」

「でしょう？ 新一もそう思うでしょう？」

快斗の寝た振りポーカーフェイスも崩れ、薄目を開けてルームミラーを睨んだ。怪盗だった時の様な鋭い殺気すら出しているのに、わざとそれに気づこうとしない新一。

「さっさと告っちまえて、言ってみれば？」

「え、私は流石に言えないわよ：そういう事は男同士の話でしょう？」

「俺が言うより蘭が言った方が、効き目はあると思うぜ」

「そうかなあ」

真剣に悩み出した蘭と、快斗が意識があって目を覚ましていると知ってて焚き付けるような話を振っている新一。黙っているのも癪だったが、流石に今自分が動けば快斗の肩に寄りかかっている青子が起こさねないので喋れない。

「青子ちゃん、黒羽くんの告白を待ってるっていうより、どちらかというと…」

「“青子なんかが快斗の隣に居ていいのかな” って悩んでいそうだっていうんだろう？」

「そうそう」

なおも続く二人の会話に、快斗としては耳が痛い。不運な事に凶星だからしょうがない。青子の口調を真似して言う新一の勘も鋭いものだ。

「ま、話す機会があったら言っとくよ」

「くれぐれも青子ちゃんにはバレないようにしてね」

「解ってる」

話す機会などなくとも、丸聞こえ。あんまりこのネタを続けていると快斗の無邪気な仕返しが出来そうなので流石の新一も話を中断させた。まあ怪盗時代に何度か蘭に変装されたり、コナンの前で新一に変装したりと好き勝手やってたのだからこれくらいは言わせて貰わないとな、と口の端から笑みを零した。

それに蘭は人のことばかり心配しているが、端から見れば蘭と新一も十分同じような関係の間柄だったのだから、青子には申し訳ないが快斗と青子の心配などしてられないというのが新一の本音でもあった。快斗に焚き付けるような事を偉そうに言える立場でもない。

蘭は純粹に心配をしているんだろうけれど、快斗の事だ、どうせ上手くやるだろう：と何も心配に思う事はなかった。快斗が青子を大切に思っている事等、一目瞭然だから。

「やっぱりコーヒー買いに寄るかな」

「そうね、新一も少し休憩して」

高速道路脇に立つ看板に上河内SAの文字を見つけて、新一はウインカーを出した。左車線に進入して、ゆっくりとスピードを落とす。していった。

数値的な北緯は都心と差ほど変わらなかったが、やはり暖房の聞いている車内から出ると冷え込んだ風が容赦なく吹き荒む。上着に袖を通してみんな車から降りてきた。ずっと一人で運転をしていた新一は別段疲れた様子も見せていなかったが、どちらかというと同じ姿勢で居た事に体が疲労を感じている様で、腕を思いっきり上げて背伸びをした。

女二人は寒いのか早々に建物の中へと消えていった。あくびをしながら快斗もとぼとぼとその後を追っていく。新一はとりあえず渋

滞情報を探しにいった。

「随分好き勝手な事を言ってくれてたじゃねーか」

新しいコーヒーを買い、外に設置されたベンチの上で一休憩しているとふて腐れた声が届く。わざとジャリジャリと足音を立てながら快斗が近づき、横に座った。

「二人は？」

「土産物屋見てる」

まだ目的地にすら着いていないと言うのに、女は本当買い物が好きだな…と苦笑する。長年幼馴染みに付き合わされてきた二人にとって、その辺は同意し合える話だった。

「お前らが付き合い始めるのが時間の問題なら蘭も何も言わねーんだよ。ただ、青子ちゃんに取ってただの幼馴染みだったお前が段々有名になっていっちゃう事が寂しいって話だろ？」

「へーへー、名探偵は事件だけじゃなくオトメゴコロにも詳しい様で」

まるで茶化するようにそう言って、隣に座る新一へと肩で体当たりしようとするが、行動は読まれていた。コーヒーを持つ手を変えてすっと立ち上がる。

「俺もお前の事言えないしな。告白しちまえとは言わねーけど、せめてフォロー位入れておいてやっても良いんじゃないかねえの？」

「じゃないと蘭ちゃんがお前にその話ばかり振ってくるから、だろ？」

「まあ、一理あるな」

新一と蘭、快斗と青子という関係はとても良く似ていた。高校二年の冬に四人揃って初めて出逢ったけれど、蘭と青子は男二人に比べると格段仲が良くなっていた。今年の夏の快斗のデビューの日には大阪の平次や和葉とも友人になったのだ。

そうなれば当然女達は恋愛事情に花咲かせて盛り上がる。自分の気持ちを友達同士で暴露し合って何が楽しいんだと、男にしてみれ

ば到底理解出来ない話。本人達がそれで良いなら何も突っ込まないけれど、まあ新一と快斗に至っては自分たちの不甲斐なさを指摘されている様で面白くないのだ。

「…別に、何も変わってねーけどなあ…」

ベンチに手をつけて空を仰ぐ、所々に見える冬の雲がとても低く感じた。吐く息の白さ、それが溶け込む空気とつぶやきを攫うような弱い風。快斗の少しだけ弱気な部分が、新一とも丁度良く重なる。「命がけで戻って来た時は相当泣かれたけど、それから何の進展もねーし、そのくせ聞かされるのはお前と青子ちゃんの話だぜ？責任取れ、バ快斗」

「バーロ。こっちじゃ青子も散々オレに言ってくるんだよ。工藤クンと蘭ちゃんって本当お似合いだよねーとかぬかしたり、オメーが新聞に載る度に工藤クン格好いいとかほざいたり」

「何だ俺が羨ましかったのか？それは申し訳な…」

「あのなー！だいたいテメーがっ…」

お互いに睨みを利かせて噛み付こうとしていると、視界の端に小さな陰を見つけてそちらへと視線を向ける。自分たちの方へとのかぶり向かって来ている蘭と青子の二人だった。手には何か食べ物でも買ったのだろうか、此処からでも二人の楽しそうに話す声が聞こえてきそうだった。

『つたく、しゃーねーな』

同じ言葉を同時に呟いて、ジロっとお互いを見遣る。何故こうもこんなに自分たちは“似ている点”が多いのだろうか、消して口には出せない（そして他人に指摘されるとムキになって否定する）言葉を胸中で独白した。

「行くか」

「そだな」

二人はゆっくりと歩き出した。こちらへと手を振っている大切な幼馴染みの元へ。

「次、運転変わってやろうか」
「免許取ってからモノを言え」



週末という事もあり多少の渋滞に巻き込まれたが、車内ではSAで買ったお菓子と皆のおしゃべりで盛り上がり、無事に福島県の看板が見えてきた。カーナビの指示の元、高速道路を降りてそのまま目的地まで向かう。

快斗の元に届いた一通の手紙、城川市にある児童養護施設「相模学園」。住所を入力してあるので真っ直ぐそこへ向かっている筈だったのだが、段々と町中から外れていく様な雰囲気すら感じた。まだ夕方にもなっていないというのに薄暗く、道の両脇は何処か鬱蒼と茂る林の中を彷彿させている。

本当にこの道で合ってるの：？と助手席の蘭が何度も確認して聞いてきた。彼女は空手の都大会で優勝する程の強さがあったが、この手の雰囲気には滅法弱いのだ。

「黒羽、どうだ」

「んー、方向は間違っちゃいないぜ」

後ろのシートで地図を広げている快斗に確認させた。しかし窓の外は段々と山間に向かって走っている様だった。高速を降りてからシートベルトを外してしまった快斗は、運転席に掴まってフロントガラスから周りを集中して視認していた。

「あそこか」

カーナビが目的地に到達すると合図が鳴った。丁度道の左手に古びた門が見えたのでアクセルから足を離す。減速しながらウインカーを出し、門の手前でブレーキを軽く踏んだ。全員が左側の窓に注目すると、そこにはまるで廃校を思わせるような古びた建物が聳え立っていた。

例の写真に写っていた建物に間違いは無かった。真新しい看板に

は「相模学園」の文字が書かれている。新一は再び車を動かすと、そっと門の中へと移動させた。

邪魔にならなそうな場所で駐車すると、四人はそれぞれドアから降りて建物を見上げた。小さな小学校、いやまるで幼稚園か何かの様だった。錆びた鉄棒と、わずかなスペースに置かれた子供達の遊具が寂しそうにぽつんとあった。

遠くに見える山々には厚い雲がかかっていた。自然に囲まれた場所だからなおさら、こうして日が陰ると一層薄暗く感じる。

とりあえずどうしようかと四人が相談を始めようとする、建物の引き戸が突っ掛かる乾いた音を立てて開き、中から中年の男性が一人こちらを見遣って、そのまま歩いてきた。

「どちら様でいらっしゃいますかな…？」

髪に少々白髪の混じった五十代位の男性だった。四人は軽く頭を下げて会釈する。快斗はポケットに入れていた封筒から便箋と写真を撮りだして男性に手渡した。

「はじめまして、黒羽って言います。ここの子供達から手紙を貰って来たんです」

「…ああ、君は確か…」

受け取った写真は確かにこの相模学園と子供達が写っている。男性は名乗った快斗を見てひどく驚いている様子だった。そりゃそうだろう、今やTVでも活躍する天才マジシャンと呼ばれている有名な人だった。

「こっちは友人の工藤新一、毛利蘭、中森青子です」

『はじめまして』

女性二人はニコリと微笑んで挨拶を交わした。そしてこれまた新聞でもTVでも有名な高校生探偵の名に驚きを隠せない。

「私はこの児童指導員で施設長を兼任している篠原と申します。

…しかし…あの…」

突然の有名人の訪問に篠原と名乗る児童指導員も流石に困惑して

いるようであった。子供達が悪戯に出してしまった手紙で、本人が来てしまったのだ。例えば高校生とはいえプロの奇術団に所属し、都会の大ホールでマジックを披露する様なマジシャンを呼んでしまつて、どうしたものかと。

「僕たち連休を利用して遊びに来たんです、福島までドライブしに。それで彼の元に届いた手紙を見て是非一度子供達と逢いたいと思ひまして、ここへ寄らせて貰つたんです」

児童指導員の心配を察してか、新一が機転を利かせる。蘭と青子も後ろで「そうなんです」と話を合わせるように頷いていた。

「そうですね：こんな山奥まで、わざわざいらして下さって有り難う御座います。きっと子供達も大喜びでしょう。TVで拝見した黒羽さんの事がすっかり気に入つてしまつて、毎日みんなで手品ごっこして遊んでいるんですよ」

そう言つて児童指導員は「こちらへどうぞ」と四人を案内してくれた。

スリッパに履き替えて案内された相模学園は、篠原と名乗つた児童指導員の話に寄ると、子供の数が減少して廃園になつた幼稚園の建物をそのままに作られた所だと言う。少子化問題の一方で、子供を産んでも育てられない親が増加していくこの世の中、育児放棄・虐待・金銭的な理由によつて子供を預けてくる親と様々だと言う。

そんな風に親を失つた子供たちが集まる場所だったが、お世辞にも綺麗な建物とは言えなかつた。職員の姿もあまりなく、ただ子供たちが集められているだけの場所というイメージすら受ける。

建て付けが悪いのか古いだけか、外と変わらない冷たい室内：すきま風が容赦なく吹き込んできそうだ。廊下を歩く度に、ギシリギシリと音が鳴る。

「ここです」

何だか静まりかえつた教室の前に来ると、篠原は木の扉に手を掛ける。ゆっくりと開いた扉の向こうでは、十人程度の子供たちが古

いブラウン管TVを中心に集まって、画面を食い入るように見つめていた。

「みんな、お客さんだよ」

そう言って四人に中へどうぞと招き入れる。興味なさそうな雰囲気です。一人子供が振り返って、部屋に入ってきた“お客さん”達を眺めた。

そしてそのウチの一人、見慣れた少年の顔を見るなり、みるみる目玉を広げて立ち上がった。

「くろばかいとだ!」

『ええっ!?!』

“お客さん”には微塵も興味を示さずにTVの画面に食い入っていた子供達が、一斉に振り向いた。快斗も思わずびっくりしたが、苦笑しながら手を振って「よっ」と短く挨拶した。

「本物!?!」

「まじで、ほんとに!?!」

疑問を口にしながら、子供達がどっと快斗に押し寄せる。篠原が制しようと横から手を出そうとしたが、快斗が小さく「大丈夫ですよ」と笑って、そのまま子供達に囲まれてしまった。

「本物!?! 本物!?!」

TVを見遣ると、いつだったか快斗がマジックショーの宣伝で出させて貰ったTVの映像が流れていた。ちゃんとしたTV出演とは違い、ほんの十分程度の物だったがそこでも快斗は司会者に求められて短い時間ながらマジックを披露していたのだ。

快斗はそれを確認すると、右腕の袖を少しだけ捲って子供達の頭上にかざしてみせる。彼らが今まで見ていた映像と同じマジックを披露する為。ゆっくりと腕に左手を添えると、指と腕の隙間からこぼれ落ちるようにトランプが出現する。

『すげー!?!』

感嘆の声があがるが、それだけじゃ終わらない。まるでトランプ一枚一枚に見えない糸でもついているかのように快斗の意思に従っ

て動いていく。何も準備などしていない筈なのに、快斗はお金を払われて見せる手品を、子供達にたっぷり見せてやる。本当にそれは“魔法”としか思えないマジックで…。

「どうだ？本物って解ったか」

子供達は大喜びで頷いた。いつも画面越しで見ていた快斗のマジックを生で見られる等、思っても居なかったのだ。中には安心して居る子供も居た。小さい子たちもポカンと口を開けたまま驚いていた。

「ところでこの手紙をくれたのは誰かな？」

快斗は再びあの封筒を取り出して子供達に見せた。しかし、勝手にそんな物を出してしまった事を先生に怒られるんじゃないかと心配しているのか、誰も名乗りだそうとしなかった。その様子を察してか篠原は…

「黒羽さん、皆さん、何のお構いも出来ませんが、子供達を宜しく御願います」

「はい」

「みんなも良いかい？ご迷惑になるような事はしちゃだめだからね」
『はい！』

元氣な声が教室に響き渡る。あの手紙のSOSが信じられない位に子供達は皆元氣でいた。しょうがないなあと言いたげな表情で篠原は四人に一礼して教室を出て行く。それを見計らってか、子供達も四人の手を取って教室の真ん中へと手を取って連れて行った。

子供達が一斉に一人の少年の顔色を伺った。おそらくこの中で一番年齢が上の子なのだろう。幼いながらに整った秀麗な顔立ちで、ペコリと一つ頭を下げるとようやく口を開いた。

「僕は瀬木秀二って言います…その手紙、代表して書きました。でもまさか本当に本物が来てくれるだなんて思ってたなかった」

子供達も口々に同意する。快斗はプロであり、ここは福島。まさか東京からわざわざ逢いに来てくれるだなんて子供達も夢にも思っ

ていなかった様だ。

「手紙にはマジックを教えて欲しいって書いてあったんだけど、それよりもまずこの事が気になってな。どういう事が詳しく教えてくれないか？」

快斗は封筒に軽く糊付けして元に戻しておいた切手を剥がした。

彼らが心配してここまでやってきた理由、それは…切手の裏に隠すように書かれていた“助けて”と言うメッセージだった。

「あの…実は…」

子供達は身を寄せ合い顔色を変えた。小さな女の子は泣き出し、その表情まで浮かべている。あからさまに態度が変わる子供達に、四人も首をかしげた。何に恐怖を感じているのか…口籠もる子供達。

そして、彼が震える声で呟いた…。

四人は相模学園から車で二十分程離れた旅館に宿を取っていた。どうせならと言う事で、温泉のある老舗旅館を予約していた。風情のある山奥ならではの景色と、日本家屋から望む素晴らしい庭園。雪化粧でも見られればこの上ない行った様だった。

新一は駐車場に車を戻すと、旅館の入り口から段ボール箱を持ってこちらへやってくる快斗を見遣ると、トランクを開けて車外へと出た。とつくに日は沈み、頬を掠める夜風にうっすらと湿気を感じた。

「随分でかいな」

「そうか？大して持ってきてないつもりだけど」

元々電車で来る予定だった快斗は、マジックショーで使う道具をこの旅館へと宅配便で送っていた。まあ例え車で行くと事前に知らせて居たとしても、流石にこの段ボールを入れてしまったら四人分の荷物が入らなくなる。

「しかしまあ、あの救助信号がまさか“単なる幽霊オチ”だったとはな」

トランクに大事な商売道具を閉まって快斗はぼつりと呟いた。大きな音を立てないようにトランクを締める。例の子供達が震え上がらせて話をした内容とは、学園には幽霊が出ると言う子供が食いつきそうな話だった。

「折角“東の名探偵”に御足労頂いたって言うのに、とんだ無駄足だ」

ケラケラと笑いながら新一を見遣ると、何か引つかかる事でもあるのだろうか：快斗を見ずに何かを考えている様子だった。

どうしたのかと顔を覗き込むが：

「おかしいと思わないか？」

「何を？」

「その幽霊話さ」

瀬木秀二と名乗った子供を筆頭に、みんなが目撃証言を口々に話していた。まあ確かに中には幽霊話に怯えて“見ても居ないの見た気になっている子供”も恐らく居るだろう。けれど、その話を真剣に聞いていた新一は…

「子供達が見ているのに、学園の職員は誰も見ていないっていうんだぜ？」

真顔でそう推理する新一だったが、快斗は首を横に振って見せる。「良くある話じゃん、所詮あの子達の誰かが幽霊だと誤解する何かを夜中に見ちまって、連鎖反応を起こしてるだけだろ？ 大人が誰も見ていないって、そりゃ良い証拠じゃねーか」

新一の肩を軽く叩きながら快斗は笑う。

けれど新一には引っかかる物があつた、決して幽霊等を信じて居ると言うわけではない。ただ…

「あの学園、三月末には廃園になるらしいんだよ」

「ホントか？ それ…」

「ああ、ガソリンスタンドに寄った帰りに色々聞き込みしてきたんだ」

トランクに腰を凭れ掛ける。尋常じゃない恐怖を感じている様だった子供達、幽霊等ただの見間違いか勘違いだと信じて疑えないのだが、新一のもたらした情報には“もしかしたら”と言う推理が過ぎる。

「随分前から経営が悪化し、現市長らが児童施設に関する資金援助を打ち切りにすると言いついて話を出しているって話を耳にしたんだ」

「おいおい、まさか取り壊す気かよ」

恐らくそのつもりだろう…としか返せない。他県の、ましてや財政難の事ばかりはどうしようもない。けれどほんの数時間しか会話をしていないとは言え、あの子供達の“家”が取り壊される可能性が在ると解れば、居たたまれない。

「なるほどな…」

快斗は思い返していた。普通の大人だったら馬鹿馬鹿しくて無視するであろう子供達の“ただの幽霊話”を、新一は随分真剣に（親身になって）聞いている様子だったのだ。火のない所に煙は立たぬではないが、怪談話に何か裏があるのであれば話は別だ。

「…しょうがねーなあ…夜にでも調べて来るか」

「おい、探偵の前で“不法侵入”を匂わせる発言すんじゃないよ」

「じゃーどうしろって言うんだよ。お前もそのつもりでオレに言っただろう？」

「否定はしない。だがお前一人じゃ行かせない」

新一の発言に驚きを隠せず、は？と聞き返すが彼は至って真剣だった。夜中にこっそり施設に忍び込んで内情を探ると言った快斗の元本業。今自分で“不法侵入”はダメだと言っておきながら、ついてくるつもりか…？と新一に問う。

「まさか今更オレの事が信用出来ないとか言うんじゃないだろうな」

「お前が信用出来ない様な奴なら、俺は呑気に親友なんかやってねーよ」

「……………あっそ」

ふざけた事を一々聞くなと新一は付け足す。言いたい事は解るが、面と向かって“親友”発言されると、流石の快斗も面食い気恥ずかしい。怪盗時代に散々人の事を“気障”だ何だと言って居た割に、お前こそ真顔でそういう事を言うなど、胸中で言い返していた。

「蘭達はどうしてる？」

「お前の帰りが遅いから先に風呂に行くつつって仲良く露天風呂行つたよ」

「解った」

とりあえず一旦旅館へ入ろう。そして夕飯を食べ、二人と別れてから手筈を整えよう。新一は車をロックして快斗と共に部屋へ戻った。旅館の側に茂る竹藪が、やけに薄気味悪く笹の葉の揺れる音だけが静かに鳴っていた。

◇

例の騒動が無ければ、高校生には勿体ない位の寛ぎの旅だった。幼馴染み二人は露天風呂と豪華な夕飯にご満悦の様子。二人にバレ無いように部屋ではその話題を一切せずに、相変わらず仲が良いのか悪いのか解らない様な距離で居た。

「んじゃ俺は先に部屋に戻るけど…」

まだ九時を過ぎたばかりの時点で新一は腰を上げた。日中の運転疲れを装って居るが、自然と出てくる大あくびはまんざらでもなさそうだった。

「おう、おやすみー」

「……………」

先程から繰り広げられているのは、快斗の商売道具のランプを使つての簡単な手品披露だった。あまり深く考えずに手品に見入つて素直に喜ぶ青子とは違い、蘭は真剣に仕掛けを探ってくるから面白い。

「黒羽くんって本当に凄いわ…って、プロにそんな事言ったら失礼よね、ごめんなさい」

「いやいや、まだまだ駆け出しのひよっこだしねー」

「何よー！青子にはいつも偉そうに“オレは世界一のマジシャンだ”とか大口叩くの、蘭ちゃんの前だとすぐそうやって良い格好しようとするんだから！」

両手に花、蘭と青子に挟まれてまんざらでもない様子。鼻歌混じりにトランプをかき集めて、得意げにカードを切っている。

「ねえ、この間TVで見たんだけど、テーブルの上の二枚のコインを手で一杯増やしていくマジックとかって、ああいうのって黒羽君も出来るの？」

「あゝ、やってみせようか？」

もともと手品が好きでショーも良く見に行っていた蘭は快斗のマジックにもすっかりハマっている。ましてやステージではなくて自

分の目の前で披露してくれるのだ、それはそれは楽しそうに彼の隣で目を輝かせている。

マジックを気に入られて快斗も得意気だった。よぉ～し次は～…と意気込んでトランプを丁寧な箱にしまい、蘭のリクエストに応えようと掌にコインを用意するが…

(テメー、いつまでそうしているつもりだ)

背筋に走る悪寒に驚愕し、立ち上がっていた新一を見上げると、本気で冷徹な視線を快斗へと向けていた。思わず手からコインが滑り落ちる。

「あ、あぁ…っと、オレもそろそろ寝よっかな…」

「ええー!? 快斗がこんな時間にー!?」

快斗の夜行性ぶりを知っている青子と一緒に残念がる蘭だったが、とりあえず用意したアイテムをかき集めて浴衣の袖の中に器用に仕舞う。新一が本気で殺気を放っているから恐ろしい。

「まーまー、明日思う存分この快斗様のマジックをご堪能して頂くので、今日はこの位にして置こうぜ? 明日つまんなくなっちゃうだろう」

「それもそうね、黒羽君のマジックを私たちだけで独占しちゃったら子供達にも申し訳ないものね。本当にどうもありがとう黒羽君。とても楽しかったわ」

「いえいえ、楽しんで頂けたのなら光栄の…」

と、言いかけて言葉を飲み込んだ。いつもの様に調子付いて蘭の掌に軽く口付けをしようと体勢を整えて、再び雷鳴の様な激しい視線を感じ取った。本当にこの子が絡むとお前は遠慮なしに人に殺気を向けてくるな探偵のくせに…と苦笑して立ち上がる。

「それじゃ、何かあったら携帯鳴らせよ蘭」

「解ったわ。おやすみ新一」

「アホ子は掛けてくるなよ」

「工藤くん、バ快斗なんか寝る所はお風呂場で十分だからね」

「あんなー」

「青子ちゃんも遠慮無く“俺”に電話をかけておいで、すぐ駆けつけるから」

「はい♪」

舌を出して子供の喧嘩のようなやり取りで分かれる二人を横目に、新一と蘭はクスクスと笑っていた。最も二人が本気で喧嘩しているワケではなく、これが普段の二人のやり取りなのだとは勿論理解していたのだが…

「…ガキ」

「うっせ」

二人の部屋を出るなり、思わず突っ込みを入れてしまった。

先に部屋に戻っててくれ、と快斗が言うので、新一は部屋に戻り浴衣から洋服へと着替えを終えてノートパソコンを弄っていた。風呂も済ませてあとは寝るだけだったのだが、二人はこれからやる事があった。すぐに行動に起こしてしまつて万が一蘭と青子が部屋に訪ねて来ても困る。まずはネットで集められるだけの情報を…と思い、新一はネット上に漏洩する情報を脳裏に焼き付けていた。

「ただいま」

程なくして快斗が戻って来た。ディスプレイから視線を外さずに「お帰り」と新一が呟く。けれど視界の中へ入ってきた快斗が、浴衣姿ではなくなっていた。

「お前、何処で着替えたんだよ」

「…ふっ…愚問だな」

全身黒を基調とした隠密にはもってこいの格好、怪盗時代から下調べや下準備の際に快斗が好んで着ていた格好だった。そしてその服装で戻って来たと言う事は、すなわち一人で何処かに潜入していた可能性が高いと彼は読む。

「解つてると思うがくれぐれも危ない真似はするなよ。俺たちは蘭

や青子ちゃん達と一緒に旅行に來ただけの高校生なんだから」

「ああ嫌って程解ってるぜ。：ただ：まあ何だ、怪盗の性分だ。気にするな」

快斗が決して、新一を出し抜こうとかそう言う目論見で居るワケではないと解っているから、あえて深く突っ込みをしようとしなかった。引退したとは言えあまり自分の隠密行動を知られたくないのであろう。

「それで？お前は何調べてるんだ」

「ここ五年間位の街の動きさ。これと言って目立つ収穫はねーけど、ただやっぱり過疎化が進む一方で街の活性化の為にとお偉いさん方が動いているって事は確かなんだが：」

「金の問題。意見の二分。子供の事は後回し、ってか」

「：：そうだな」

苦虫を噛み潰した様な表情で新一は頷く。

「とりあえず行くか」

「ああ」

ノートパソコンをシャットアウトし、ディスプレイを閉じた。子供達が怯える学園の幽霊と、大人達の都合で進む子供達の未来。ただでさえ親なしと言う立場で学校の友人達とは馴染むことが出来ずに居る中で、このまま彼らの居場所が無くなってしまったらと思うと尚更放っておけない。



しかしながら手口が鮮やかだな：と新一は感心していた。言葉に出せば調子に乗るのは目に見えて居たから飲み込んだが、流石“元怪盗”だけあって彼の隠密行動には一切の無駄が無かった。旅館を抜け出して二人は例の施設へと向かい、敷地内に忍び込んだ。

街灯もほぼ無いに等しい真っ暗闇の中だったが、快斗の気配は完全に闇と同化していた。かつては子供の姿で散々追いかけていたが、

なかなか捕獲に成功出来なかった理由も頷ける。自分に僅かな隙でもある物なら、例えば目の前に居る快斗の姿ですら見失いそうになってしまうのだ。

「工藤」

「ああ」

二人の頭の中には既にこの学園の見取り図が組み立てられていた。茂みの中に身を潜めて居ると、随分遠い場所から車のエンジン音が聞こえてきた。ヘッドライトの光が届いて来ない所を見る限り、この敷地内の外で何者かが車を駐車させた事になる。

しかしこの辺りには車を駐車させて用事を済ます様な場所は何もない筈だった。車を端に寄せて何かをするのであればエンジンを止める必要はない。僅かな間を置いて、乗用車のドアが閉まる音が二回聞こえた。

「複数、か…」

「車の様子、見てきてくれるか」

「はいよ」

木に身を隠していた快斗が短く返事をする、草葉を踏みつける音もせずに気配が消えた。

「（まるで忍者だな、あいつは）」

快斗の事を苦笑しながら学園の入り口を睥っていた。入り口に設置されている光量の少ない灯りに照らされて、二人組の人影が見えた。怪しまれないように動いている様子ではあったが、こうして見る限り“プロ”ではなさそうだと伺える。

そして人影は迷うことなく施設入り口へと到達し、扉に手を掛けた。しかし鍵が掛かっている為、扉は開かない。二人組はすぐさまその場を離れて、丁度新一が隠れている茂みの前までやってくる。一人が鍵の掛かっている窓を見つけ、もう一人を手招きして呼んだ。

そこは、丁度子供達の部屋へと通じる廊下の窓のうちのひとつだった。中を伺い、侵入する。

「（やはりか）」

新一は戻ってこない快斗へと連絡を取る為に、携帯電話を取り出した。ディスプレイを開くと待ち受け画面にはいつのまに來ていたのか、新着メールが一通届いていた。素早くそれに目を通し再びポケットへと仕舞った。

そして周囲を警戒しながら、二人組の男が侵入した窓へと向かった。

大胆にも彼らは懷中電灯を付けて施設の中を嗅ぎ回っていた様子だった。ある程度の距離を置いて、その後を追う。靴音はしないように警戒している素振りだったのだが、気配丸出しでとてもその道のプロと呼べるような人間じゃない事は確かだった。

これでは子供達に気が付かれても当たり前だ。そしてその人影は真っ直ぐある場所へと向かって歩いている。快斗の戻りが遅い事だけが気がかりだったのだが、あの男がハマする事はまず無いだろう。これは探偵の本業ではなく、彼の得意分野なのだから。

そうしているうちに男達は応接室に隣接する施設長の部屋へと侵入した、無論、施錠されていない様子だった。不用心にも程があるものだったが、新一は黙ってその後を追う。

廊下で息を潜めて中の様子を伺っていると、案の定部屋の中を物色する様な音が聞こえた。流石に夜中だけあって彼らも物音立てないように気をつけているのだろう。しかし、ガサガサと引き出しをあけては中を引っかき回すその音。

新一は、ふうと短く息を吐き、ドアノブを回した。

「こんな夜更けに電気も付けず、一体何を探しているんですか」

突然部屋に入ってきた新一に驚いた様子で、男二人は懷中電灯で新一を照らした。黒いスーツを着込んだ彼らはサングラスで目元を隠し、袖口で顔を隠すように覆った。

「お前、何者だ」

児童指導員にしては若すぎる、しかしここに預けられている子供

ではない。彼らは知らされていなかった突然の来訪者が一体何者だか解らなかった。暗くて良く見えず、もしかしたら若い刑事では無いかとも錯覚していた。

「工藤新一、探偵ですよ」

「何だって!？」

「あの、高校生探偵の…」

二人は慌ててお互いの顔を見遣った。マスコミにもよくとりあげられるあの有名な高校生探偵が一体どうしてここにと、恐らく冷や汗を流しているだろう。明らかにこの部屋を物色していた事は一目瞭然であり、警察を呼ばれたらおしまいだ。

二人は頷いて、解りやすい行動に出る。

「退けっ!!」

引き上げようとして二人は扉へ向かって走った。幸い、黒光りの物騒な獲物は持っていないようだったが、左右から黒スーツの男が二人突進してくる。ソファを飛び越えた一人が新一の胸倉に掴みかかるうと腕を伸ばしかけたその時。

「やめねえかっ」

「うっ…」

新一の立つ扉の向こう、廊下から一喝する初老の男の声。それを聞いた彼らはビクツと体を硬直させて一步退いた。

「何故…先生が此処に…」

しかしその部屋へは入ろうとしない気配に、彼らは困惑している様だった。唯一、その声を発した人物が誰だか解っている新一は、彼らから目を離さずにそっと扉のドアノブに手をかける。

ギィと蝶番が音を立てて開かれた扉の前には、恐怖に顔を震え上がらせた一人の男が立っていた。しきりに何かを気にしている様な素振りで目が泳いでいる。

彼らに「先生」と呼ばれたその男は、何者かに指図されるがままゆっくりと部屋の中へ入る。そして、男の陰に隠れるように半身に構えていた快斗が後ろ手に扉を閉めた。

「先生、これは一体…」

何者かに脅されているかの様な男の動きだったが、後ろにいたのは工具のドライバーを握る新一に良く似た高校生程度の少年だった。背中に銃を突きつけられているとばかり思い込んでいたのであろうが、それは実はただのマイナスドライバーだった。

「貴方は市長の顧問弁護士、西門尚蔵さんですね」

「……………」

新一の問いに無言で通す西門だったが、快斗は部屋の電気を付けた。彼らは突然灯りが付き軽く目を伏せる。西門の着るダークブルーのスーツの襟には長年その男に至福をもたらしたであろう日本弁護士連合会から貸与されているバッチが付いていた。

此処へ来る前に新一はネットで調べた情報で西門の顔写真も確認済みだ。

「彼らは貴方の直属の部下である事は間違いないありませんか？そして…この児童養護施設である学園に夜毎忍び込み、何かを物色していた」

「知らん、僕は知らん…」

この期に及んで白を切るつもりなのか、いくら世間で有名な高校生探偵とは言え孫ほどにも年の離れた少年に大して全く恐れている素振りを見せない。けれど自分の後ろで銃を突きつけていた男だけは油断ならない。十一月だというのに西門の額からは大粒の汗が吹き出していた。

「おい、その辺にしといてやれよ。まともに会話も出来やしない」

「ハイハイ」

「なっ…!!??」

やれやれと言った感じで新一がそう言うと、快斗は西門の背に突きつけていたドライバーを虚空で消した。掌で客に見えないように瞬時で袖の中に隠すだけの至って初歩的な手品だったが、軽くステップを踏むように西門の後ろから姿を現した。

「お前はっ…」

まるで幽霊でも見たような驚愕ぶりで快斗を見た。白い歯を見せてニヤツと笑っている極普通の高校生だった。そして何かを探す様に西門は自分の背後を見遣るが、当然そこには快斗以外誰も居ない。「なにになに？ 殺し屋の幽霊にでも脅されてたの？ おっさん」

「そんな、馬鹿な…」

新一に車の様子を見てくるように言われた快斗は、気配を殺して車に近づいた。新一も快斗も、車を調べる事で証拠を探ろうと目論んでいたのだったが、思わぬ収穫だったのだ。後部座席で腕組みをして待っている西門尚蔵がそこに居た。

これは黒幕を捜す手間が省けたとばかりに快斗は新一の携帯にメールを送信すると、車から出て行った部下に変装して車のドアを開け、車外に下りた西門の背後に回り込んで銃に見せかけた工具のドライバーの柄を突きつけ、声色を変え、殺気を放ってここまで連れてきたと言う寸法だった。

「貴様…」

まんまと騙された事に腹が立った西門は、怒りで頬を引き攣らせていた。自分の悪事が警察機関にでもバレたのだと思っていたのだろう。孫程にも年が離れた少年二人に、言い様のない苛立ちを感じていた。

「こいつらを捕まえるんだ、不法侵入で警察に突きだしてくれる」
『はい』

捻りのない展開と言うか、読み通りの行動と言うか、黒スーツの男二人は躍起になって新一と快斗を捕まえるべく懷から刃渡り十センチ程度のナイフを取り出して襲い掛かって来た。けれどいつの間手に構えていたのか、快斗は“怪盗時代”から愛用しているトラップ銃の引き金を素早く二度引いた。

「何だっ！？」

射出威力を自在に変えられるおもちゃの様な銃だったが、彼らの手のナイフをはじき飛ばす位はわけなかった。標的を射貫く照準もミスなく、男達には怪我はない。あまりに鮮やかに撃ち抜かれたモ

ノだから思わず呆気にとられてしまった様だ。

「不法侵入とは心外ですね。僕はここの子供達から“夜中に出現する幽霊の正体を暴いてくれ”と依頼された探偵ですよ？これは歴とした調査の一連です」

「それにさ、おっさん、あんたに言われる筋合いはねーぜ？」

トランプ銃の引き金部分に人差し指を入れてくるくると回しながら、快斗はケラケラと笑っていた。自分たちを不法侵入と言える立場か？あんた達は…と。

「お前ら、何をボサツとしているんだ！さっさとこいつらを縛り上げんかっ！」

怒りで顔を真っ赤にして西門は怒鳴り散らす。しかし、ナイフをはじき飛ばされた部下の男達は、その命令に従おうと再び新一と快斗を見遣るのだが…

「うっ…な、何だ…」

「体が…」

一体どうしたというのか、立つこともままならないと言った様子で二人は床に崩れ落ちた。

「な、何をしておるっ」

激しい眩暈でも覚えたかの様に動けなくなった、二人同時に。突然どうしたのかと伺うか、新一や快斗が何か仕掛けた様子は一切見えなかった。けれどそう思っているのはその三人だけだ。

「（何仕込んだんだお前は）」

「（心配すんな、毒氣の一切無いただのしびれ薬さ）」

男達が手に構えていたナイフを撃ち落とす為に先程射出したトランプに、薬を仕込んでいた様子だった。二人は視線だけで会話すると、再び西門に向けて口を開く。

「僕らは貴方を裁く事は出来ません。政治の大変さも僕らには解らない。けれど身寄りのない子供達が暮らすこの学園に忍び込んだ事は立派な犯罪であり、窃盗未遂でもあるんです」

泰然とした態度で新一は告げた。

快斗は何処に持っていたのか、荷造り様の丈夫な縄を手につつと、颯爽と西門の背後に回り込んで後ろ手に縛りあげた。最後まで抵抗して見せたが、新一の語る真剣な瞳を何処か真っ直ぐ見つめる事が出来ずに居た。

ナイフを持っていた男達も縛り上げて、床に寝転がらせる。部屋の隅で落ちていた彼らの凶器をそっと拾い上げて、テーブルの上へと置く。

「さあ、そろそろ出て来て説明したらどうですか？」

「施設長の、篠原克之さん」

新一と快斗は、応接室と施設長室を繋ぐ室内に設置された扉へと問い掛ける。

そして、ドアノブが静かに回転した。

探偵として、こういった後味の悪い結末を何度も体験してきた新一だったが、泣き崩れる様に事情を話し出した児童指導員で施設長を兼任している篠原の言葉に、やり切れない思いを馳せた。

そもそも、子供達の話聞いた時点で“もしかしたら怪談ではなく、実際に夜中に人が忍び込んできているのではないか”と言う可能性を考えていた。施設の職員は誰も見ていないと言う事は、逆に考えれば職員が居る時間帯には幽霊は出ない。子供達の日撃情報では、時間帯は全て深夜だった。

そしてここで子供達と一緒に住んでいる施設長の篠原克之。子供達が寝静まった後に当然見回りはしているだろう。

「彼らが侵入しやすい様に、わざと廊下の窓の鍵を開けて置いた。そしてこの部屋の扉にも鍵はかけていなかった」

「ああ、そうだ……。ここを取り壊すと言われて最初は私も必死になって反対していた。子供達の居場所は私が護らねばならないと……。けれど資金援助も打ち切られてしまい、どうする事も出来なかった……。私は全くの無力なのだ……」

「それでこの権利書を盗む為にやってくる連中を黙認していたってワケか。だけどそれじゃ意図的にこいつらに荷担していたと取られても否定は出来ないぜ？」

子供達の居場所を手放すワケにはいけないけれど、現実には巻き起こるこうした問題だけは一人の人間ではどう太刀打ちすることも出来ない。施設に襲いかかる経営難はどうしようもない。誰もこの施設に対して見向きもしない、けれどこの人だけには最後まで子供達

を護る為に奮闘して欲しかった。

新一にも快斗にも、こうした大人の問題を理解することが出来ても、この人の味わった苦しみはそう易々と理解する事は不可能だった。真相を暴き出す事が出来ても、二人は所詮第三者。

「…あとは警察にお任せします」

二人は篠原だけはそのまま拘束せずに部屋を出て行った。けれど新一も快斗も携帯で警察を呼ぼうとはしなかった。出来る事ならこれから先の問題は篠原の判断に委ねたいと考えていた。

そして、もう一つ：

「やっぱり、そういう事だったんですね」

子供が一人、薄暗い廊下の壁に手をついて二人の前にぽつんと立っていた。紺色の半袖のTシャツにジーパン姿でそこに居る。快斗にあの手紙を代表して書いて寄越した、瀬木秀二と名乗ったあの少年だ。新一と快斗は罰が悪そうな顔をして見遣った。

「気が付いて居たのか？」

「薄々ですけど、篠原先生が僕たちを見る目が段々何処か辛そうな感じがし始めて、他の職員の大人達も何だか難しそうな話をしているから…きつと僕らは、居るだけで迷惑なんだろうなって…」

「何馬鹿な事を言ってるんだ」

話を聞かれてしまった事は二人のミスだったが、新一は少年に駆け寄って目線を合わせる様に膝を折った。そして少年の両肩に掌を乗せてしっかりと視線を合わせた。

「君たちの現状は全て大人達が原因なんだ、決してそんな事はないんだよ。頼むから大人を見限らないでやって欲しい…」

原因を探ったところで解決は出来ない。大人でも抱えきれない現実問題の壁に打ちひしがれてしまった篠原を糾弾する事もだ。これから先、この子達の為に何が出来なのか…まず最初に議題にあげなければいけないのはそこだった。

「大丈夫、オレ達に任せておけて。オメーはさっさと部屋戻って早く寝ろ！明日はこの快斗様がすんげーマジック披露してやつからよ♪」

快斗はあっけらかんと子供の様に右手で作ったピースを向ける。みんなには余計な心配をかけたくない、笑っていて欲しい。彼らの居場所を、護りたい。

「うん、楽しみにしてるよ」

「ああ約束だ」

二人は指切りをした。彼は安堵の表情で二人の前から居なくなる。部屋へ通じる廊下を、何度も振り返りながら新一と快斗へと手を振っていた。

「…帰るか」

「…そうだな」

外へ出ると、吐いた白い息がぼんやり虚空へ消えていった。やり切れない思いを抱えた二人が見上げた十一月の中天の空に、やたら青白く光る月が一つ輝いていた。



翌日、快斗の噂を聞きつけた子供達が相模学園にどっと押し寄せた。遊戯室はあつという間に子供達で埋まり凄い数になった。子供達が通う小学校の生徒達も、一緒になって快斗のマジックに夢中になっている。それ程大掛かりな物は披露できないと言っていたが、ステージ上で見せる彼の奇跡は子供達に満開の笑みを咲かせて見せた。

簡単なマジックを子供達に教え、夢中になって練習している。仲間外れなど無く、みんなが一緒に楽しんでいた。

「アホ子、お前もちょっとは手伝え！」

「何よー！快斗は天才マジシャンじゃなかったのー！？」

「こんだけの子供の面倒を一人で見れるかつーの！」

次はあれをやれだ、これを教えろだと快斗の服の袖や腕を引っ張る子供達に、流石の快斗も助けを求めてきた。青子はしょうがないわねえと笑いながらも、快斗のアシスタントをする為にその場を離れた。

すると遊戯室の後ろの扉が開き、施設長の篠原が入ってきた。勿論、子供達は気が付いて居ないのか快斗に夢中だった。大喜びではしゃぐその子供達の姿を見て、篠原も何処か安堵の表情を見せていた。

「工藤さん、昨夜は申し訳なかった」

「いえ」

パイプ椅子に座っていた新一は立ち上がって挨拶した。

あれから警察を呼び、市長の顧問弁護士であった西門尚蔵は部下共々事情聴取の為に連れて行かれた。篠原は子供達を残して施設から離れる事が出来なかったのも、今日新一や他の職員達が来てから警察へと行っていた様子だった。

それ以上何も話そうとしない篠原だったが、ここに集まって居る多くの子供達と戯れる孤児達が、一緒になって笑っている姿を見られて、それを目に焼き付ける様に唇を噛んだ。

そして、蘭の隣に座っていた一人の男性がずっと椅子から立ち上がった。

「篠原さん、ご紹介します」

「私の母のがお世話になっている、弁護士の滝丘さんです」

滝丘と呼ばれた男性は、自分の名刺を篠原に手渡した。軽く頭を下げて会釈する。

「はじめまして、滝丘宗輔と申します」

『お母さんに連絡を?』

『ああ、お婆さんの知り合いの弁護士が福島に居るって蘭言ってた

だろう？連絡取れないかどうか頼んでみてくれないか』

今朝早くに起きた新一は、弁護士である蘭の母親に連絡を取った。昨夜あった一件を掻い摘んで説明をして、この児童指導施設を何とか存続させる為に力を貸して欲しいと。

「篠原さん、この施設を：子供達を護る気があるのでしたら、私は全力でお力添えします。市長らの目論見も全て暴き出して、子供達を護る事を第一に考えませんか？」

『そんな事があったの：』

『子供達の事を真剣に向き合って考えてくれる大人が必要なんだよ』
『解ったわ新一、お母さんに聴いてみるわ』

「市のお金は市の為に使われなければいけません。子供達はいずれ国を背負って立つ大事な存在です、法は必ず彼らを護ってくれます。ご安心下さい」

篠原は、差し出された滝丘の手に一瞬だけ躊躇した。力強いその言葉を、もっと早く聞けるように本来なら自分が動かなければならなかった。プレッシャーに耐えられなかった自分の弱い心に、諦めという要素に加えて、西門の思惑を自分から招き入れてしまったのだ。

結果、不本意だったとは言え：一番裏切ってはいけない子供達の事を裏切ってしまった。

「ああー！篠原センサーだ！」

「センサー！」

快斗が作った紙飛行機は、風もないのに教室をぐるぐると回っていた。子供達の頭上を、そして篠原の足下へと落下する。子供達がそれを追って、篠原の元へと集まった。

「センサーも来なよ！くろばかいとの手品、超すげーよ！」

「そうだよ！センサーも教わりなよ！」

親の居る子供も、居ない子供も、今はそんな事何も考えていない。一緒になって笑顔で喜んでいる。自分の手や腕を引っ張って遊戯室の中心へと連れて行く子供達が、本当に幸せそうで頬が緩んだ。

「こらこら、あんまりご迷惑になる事をしちゃダメだよ」

「大丈夫だよ！ねー次、次は鳩出して鳩ー！」

「おっしや、んじゃ此処じゃちょーっと狭いからな、みんなで外行こうぜ！」

立ち上がって外へと向かって走る。みんなが快斗の後について行く。みんな手を繋ぎ、無邪気になって今を楽しんでいる。

「ったく、アイツが一番子供だな」

「ふふ、本当ね」

青空から一斉に姿を現した真っ白な鳩たちが、快斗の指笛に従い風を舞う。

はしやぎ声が止む事なく、いつまでも子供達は走り続ける。

「急な申し出で本当にすみませんでした。学園の事、宜しく御願います」

「ああ、任せてくれ」

新一はそっと、滝丘に頭を下げた。

子供達も帰りはじめ、快斗は商売道具を段ボールに閉まって新一の車のトランクに乗せた。珍しく快斗がへとへとなっている姿を見て、クスリと笑う。

「そっちは上手くいったのか？」

「ああ、多分な」

「多分かよ：こっちはもうトランプ一枚出す気力もねーつつーの」
「そりゃあれだけの子供達のリクエストを次から次へと聞き、おまけに外に出れば一緒になって鬼ごっこだドッチボールだのとはしゃ

げば、そりゃ疲れるだろうと新一は呆れていた。

「此処から先は俺達がどうこうしてやれる問題じゃないからな。プロに任せておけば大丈夫だろう」

篠原さんも居る事だし…と付け加えて快斗も頷いた。

車をロックして二人は再び校舎に戻る、すると入り口の戸の外で手を振っている瀬木秀二の姿を見つけた。ニツコリと笑って二人に向かって頭を下げる。

“ありがとう、新一さん、快斗さん”

彼の居る方へと歩いていると、少年の声が二人の耳に届いた。いや、耳と言うより…

「あれ？」

もう一度少年を見遣るとそこに姿はなく、戸も閉まったままだった。

けれど確かに、まるで脳に直接語りかけるようなそんな声が聞こえた。

「…何、お前何かしたのか？」

「いや？オレじゃねーよ…」

お互いの顔を覗き込むが答えは出ない。小走りで少年が居た所へと向かうが、そこに隠れられるスペースなどなかった。

『どういう事だ…？』

頭を抱え込むように昨夜の事を思い返していた。この十一月の寒い夜中に、廊下に居た少年は確か紺色の半袖のTシャツにジーパン姿だった。勿論、今二人の前に現れた少年もだった。

しかし、先程の快斗のマジックショーで一緒に遊んでいた筈の彼は、ちゃんと厚手のパーカーを着込んでマフラーをつけていた。顔は同じ少年だったが、はつきり言って違和感だらけだ。

「おい青子、瀬木って奴何処行った!？」

「なあ蘭、秀二って子は何処だ!？」

二人は猛スピードで遊戯室へと戻ってきた。散らかった部屋を片付けていた蘭と青子に掴み掛かる様に二人は問い掛ける。

「えっと、子供達なら疲れてお昼寝するって部屋に戻ったわよ？」

「部屋だな、解った」

それだけ聴くと、二人は再び踵を返す。が、しかし：

「僕がどうかしたんですか？」

廊下から二人を不思議そうに見つめている例の少年がそこに居た。まじまじと二人は少年を見つめるのだが、確かに彼はちゃんとした格好でそこに居た。真剣な目で自分を睨むように見つめてくる二人に、少年は何事かと驚愕している様だった。

「ちょっと来い」

「あ、あの」

快斗に腕を引っ張られ、蘭と青子に聞こえないように少年を教室の端へと連れて行く。パイプ椅子に座らせて、二人は少年の視線に合わせるように膝を折った。

「お前、昨夜の夜中の事は誰にも言っていないだろうな？」

「へ…？ 昨夜の…夜中？」

「そうだ。お前、部屋を抜け出して応接室の前に居ただろう？」

「な、何を言ってるんですか？ 僕は部屋なんか抜け出してないし、ましてや応接室なんかには行ってませんよ？」

キョトンとした目でそう言う少年だった。まるで嘘をついている素振りはなく：

「新一さんと快斗さん、昨日夕方には帰られましたよね？ 夜中にまた来られたんですか？ あっ、もしかしてマジックショーの準備でいらしてたんですか！？」

一体どういう事だ：

二人は横目で疑問をぶつけ合う。

子供達の中には、この少年と似ている子は居ない。背格好は同じでも、会話をしたのだから間違う筈はなかった。

けれど、明らかに不自然だ。

そう：二人の前に現れたこの少年にそっくりな男の子は、紺色の半袖のTシャツ姿で：

「お前、兄弟は？」

「僕ですか？ 一個上のお兄ちゃんが一人いますけど」

『この学園に！？』

もの凄い剣幕で、まるで尋問の様に質問を投げかけてくる新一と快斗に半ば恐怖を覚えつつも、少年はそっと左腕を伸ばして壁に貼ってある一枚の写真を指さした。

「それです…」

額縁に入っているB5サイズ程度の大きさに引き延ばされた一枚の写真、そこには子供達が川辺で遊ぶ元気な姿が映し出されている。

「あっ！」

「こいつだったのかっ！」

そして中央に写っているのは、少年と同じ顔をした同じくらいの背格好の少年が二人。紛れもなく兄弟だと見てすぐ解る位に、良く似ていた。

しかし、安堵の溜息を漏らす二人に対して、少年は不思議そうに口を開いた。

「兄の優一です。僕と一緒に子供の頃にここへ預けられたんですが、去年の夏に、病気で死んだんです。：元々身体が弱かったので…」

弱々しくそう漏らす少年の言葉に、新一と快斗は現実にはビビが入るような不可思議な音を聞いた。ぎこちなく顔だけ動かして、二人は見合う。

「え…」

「え…」

全身の毛穴から汗が噴き出るような感覚を覚え、背筋に冷たい風が吹いた。

「何してるの？ 新一」

「どうしたの？ 快斗」

「って言う事は…」

『(幽霊話ってマジだったのかよー！)』

キョトンと首をかしげる秀二を余所に、二人は顔面蒼白になっていた。自分を抱えて震え上がっている様子だ。何に驚いているのかさっぱり解らないと言った風な秀二と蘭と青子だったが、悲鳴にならない悲鳴をあげている二人を見て、思わず苦笑した。

「フフ、変なの」

三人の笑い声に混じって、何処か遠くから少年の声が聞こえてきた様な気がしたけれど、それは誰も気が付かなかった。

学園の中からか、それとも写真の中から聞こえたのか…。

まあそれは、誰にも解らないお話。



一泊目の夜よりもどっぷりと疲労困憊している様子の新一と快斗は、旅館名物である露天風呂に二人仲良く浸かっていた。乳白色の温泉で、日本庭園を眺めながらの良い景色だった。

身体の芯から温まり、このままお湯に溶けてしまいたいような位だ。

二人は最後の最後に残った謎について、もう話題に出そうとはせずにただぼんやりと空を見上げたり水面を見つめるばかりだった。

「なー、工藤新一」

「何だ、バ快斗」

「…あの封筒の切手に隠されてたメッセージって、結局誰が書いたんだろうな」

子供達を書いた便箋、秀二が代表して書いた相模学園の説明が書かれた便箋、そしてまた別の子が書いただろう封筒の宛名。

「手紙に幽霊話を書いてオレ達を呼びつけたって職員に知られたら、子供達は怒られると思ってわざわざ切手にメッセージを隠したのかなあって最初思ってたんだけど」

「そうだな、考えてみりゃ“結局は同じ事”なんだよな。…理由は

どうあれ有名人に勝手に手紙出して勝手に呼びつけてんだからな」

露天風呂の縁の岩に置いてあるタオルを取って、頭に乗せた。快斗は風呂の浮力を浸かって足を出したり引っ込めたりと遊んでいる。「名探偵にも解らねってか」

「お前良く俺に言ってたじゃねーか、謎は謎のままにしておいた方が良い時もあるって。今回ばかりはその通りだと思うぜ」

「そうだな…」

二人は見遣って口の端から笑みを零した。何だかんだ言っても、自分たちが最善だと思った行動を取ったんだ。これで良かったのかどうか、それはまたいつか子供達が快斗へと元気にしていると頼りをくれた時に解る事。また幼馴染みを誘って、四人で遊びに来ればいい。

「そーいや黒羽、お前昨日一人で何処潜ってたんだ？」

「は？」

「先にあの施設行ってたワケじゃないんだろう？ほら、蘭達の部屋から俺らの部屋へ帰る途中で“先に戻ってる”って何処か行ってたじゃねーか」

新一にそう指摘されて首をかしげて見る、そして「ああー」と言いポンと手を叩くと：

「そうだ、すっかり忘れてた。アイツにカメラしかけてたんだよ」

「カメラ？」

そう言うと、快斗は湯船に浸かったまま空に向かって指笛を鳴らした。星の瞬く空から、一匹の白い鳩が滑空する。

「万が一証拠が必要になった時に映像があれば一番だろう？あの施設、全くって言って良い程監視カメラの類が設置してなかったからアイツの足にくっつけて先に向かわせてたんだよ」

「なるほど…やる事がちつとも変わってねーな、お前」

呆れて物が言えないといった素振りで、木に止まっている白い鳩を見上げた。片方の足にはほんの小さな小型カメラが付いている。快斗は鳩に向かって「後で取ってやるからな」と呑気に手を振っ

ていた。

『あ、快斗の鳩だ!』

『ええ!? どれどれ!?!』

と、突然女湯の方から蘭と青子の声が聞こえた。あいつらも今頃風呂か、等と思いつながら声のした方向を見ると、当然の事ながら高い塀で区切られていて二人の姿は見えなかった。

『手品で使わない時は、外で放し飼いにしているのね』

『あんな所に止まってどうしたんだろう? おーい、おいでー』

青子が両手を振って鳩を呼んだ。すると、主の幼馴染みという事で青子の事も全く警戒していないのか、鳩は喉をクルクルと鳴らすと羽を広げて枝から飛び上がった。

『おい、黒羽…』

『んあ?』

『ま、まずいんじゃない?』

『なんで? あいつ青子には懐いてるからダイジョブだよ』

『いや、だから…ほら…足に…』

『キャアアアアアアアアアアッ』

新一の声を遮るように、女湯から青子の悲鳴が響き渡った。快斗は足が滑って思わず頭からお湯にザブンと沈む。そして慌てて温泉から出ると…

『青子ー! どうした、何があった!』

血相を変えて女湯へ向かって叫ぶ快斗だったが、その一方で新一はそうそうに風呂から上がって居た。

『快斗オオオ! あんた、何堂々と鳩にカメラ付けて盗撮してんのよ
おおおおお!』

『あ…』

その後、新一はろくに髪も拭かずに浴衣に着替えると風呂場を後にした。快斗はただ一人、弁解しようと頑張るが掃除用のモップを武器に襲いかかる青子からただひたすら逃げ惑っていた。

「だからそれは違うんだってばよー！ 工藤お前も何とか言ええええー！ー！」

昼間に子供達にせがまれて散々遊んでやって疲れていた快斗は、あっという間に青子に捕まってしまった。怒りの血管が浮き出ている青子を、最早止められる術はなかった。老舗旅館の露天風呂に響き渡る若きマジシャンの断末魔は、そのまま暫く続きました、とさ。

「ごめんね。起こしちゃった…？」

てつきり青子だと思つていた。けれど考えてみればそんな筈はな
いな、と苦笑した。露天風呂での一件で青子にこっぴどく怒られて
夕飯抜きが執行されていたのだ。

「蘭ちゃん！」

先程からグーグーと鳴っていた腹の虫だ、蘭がそつとお盆に乗せて持ってきたおにぎり三つと香の物が乗った小皿を見るなり、快斗はガバツと起き上がった。余程お腹が空いていたのだろうと思い、蘭はクスクスと笑いながら窓脇にある小さな卓袱台にお盆を置いた。

頂きますと手を合わせるなり、お預け食らっていた犬の如くおにぎりや頬張った。昼間の体力消耗に加えて露天風呂では青子にボコボコにされ、流石の快斗も干上がる寸前だったのだ。

「めっちゃくちゃ美味しいよ、蘭ちゃんのおにぎりは世界一だぜ！　　」
 ！　　「まったく工藤の奴が羨ましいよホント、ああマジで超うめえ〜」

全く噛んでいる様子もなく、口の周りに米粒を付けながら子供の
ように食べていた。何だかおかしくなってしまうて、溜まらず蘭は
呟いた。

「そのおにぎり作ったの、青子ちゃんよ」

「…へ…？…ぐうつ…ごほっ…！」

「ちよっ…大丈夫！？黒羽君…！」

蘭の言葉に驚いた快斗は噎せ返ってしまった様子だった。慌てて背後に回り込んで背を摩る。昼に転がっていたペットボトルの水を取ろうと腕を伸ばしていたので代わりに取って渡すと、無理矢理口の中に咥えて流し込んだ。

「ごほっ…ぐはっ…し、死ぬかと思った…」

肩を上下させて何とか助かった事に安堵していた様子だったが、蘭は思わず吹き出してしまった。遠慮なしに笑う蘭に向かって流石の快斗もじろりと睨むのだが、幼馴染みに良く似た笑みで笑っている蘭を見るなり快斗も口元が緩んでしまった。

「今朝ね、昨夜の事、新一に聴いたわ」

「…あゝ、そう」

「新一が慌てて青子ちゃんに説明していたわ。鳩の足に付けていたカメラの事とか、誤解されたままじゃいくら何でも黒羽君が理不尽だからって」

別に今更余計な事を…と蘭が入れてくれたお茶をすすりながら、ぼんやり窓の外を眺めた。風呂場で一目散に逃げた新一の事に少なからず腹立てていたらしい。

「おにぎり、自分で持って行ったら？って私も新一も説得したんだけど、絶対イヤだって言って私に頼むのよ。…それって何でだか解る？」

「何でって…まだ怒りが収まらないからだろ？」

窓ガラスに映る、青子に似た蘭にそう言くと、蘭は強く頷いてテーブル越しの快斗の手にそっと触れた。驚いて蘭を見つめ返すが、彼女は真剣な表情で口を開いた。

「そうよ、その通りよ黒羽君。…自分に何も言わずに危ない事に首を突っ込んでいた事を後で知らされて、それで怒っているのよ」

「蘭…ちゃん…」

彼女の温かい指先がしっかりと自分の手を握っていた。新一に昨夜の話を聞いた時に、蘭も恐らく同じ思いだったのだろう。部屋に戻ると嘘を付かれて、本当は快斗と二人夜中に宿を抜け出して施設へと出向いていた。何処まで新一が説明したか快斗は知らなかったが、窃盗犯に刃物で切りつけられそうになったと知ったのなら、そりゃ心配で怒るのは当然だ。

「余計なお世話だって事は解っているけど、これだけは聴いて欲しいの。例え黒羽君が変わらなくても、黒羽君を取り巻く環境が変われば、一番近くに居る青子ちゃんが一番淋しい思いをしていると思うわ。だから隠し事をされたりするのも、一番傷つくのは青子ちゃんなのよ」

行きの車の中で、新一に快斗と青子の事を話していた蘭を思い出した。自分たちも似たような境遇だというのに、友人の青子の事を何故か親身になって心配している。

青子の事は快斗が一番良く解っていると思っていた。

青子の事は快斗が一番想っていると思っていた。

けれど、快斗には見せていない青子の一面を蘭は知っていた。青子の抱える不安を蘭は解っていた。だからこうして、自分の事のように必死になって居るんだろう。

「蘭ちゃんもそうなの？」

「え…？」

「工藤に、何か隠し事でもされてたの？」

快斗の手を離れた蘭の手を、今度は快斗が握り替えた。ポーカイフェイスで見つめてくる快斗の瞳に、思わず吸い込まれそうになっていく。

新一はコナンの姿だった事は蘭に黙ったままだと快斗に言っていた。そして快斗も又、怪盗だった事は青子に告げていない。自分の中でそれを過去として忘れ去る事は簡単だったけれど、一番近くに居た人にとっては、余りに大きすぎる秘密だった。

「…いつか…」

蘭の脳裏に過ぎる、思い出の中になかなか収まりきってくれない小さな少年の姿。今はもう遠い外国で暮らす両親の元へと戻った、蘭の大切な男の子。理由は一切解らないけれど、蘭は確信している。ずっと側で自分の事を護ってくれていたあの男の子が、新一だという事を。

そう、例えばどんな姿でも…間違える筈はない。

「…笑いながら話してくれるんじゃないかって、信じて居るわ」

やっと新一が戻ってきてくれた、それだけで十分だった。新一が黙っていたのなら訊かずに居よう、そしていつか…いつになっても良いから話して欲しい。彼の隣に居て、ずっと側に居て待っていようと蘭は決めている。

「そっか」

もしかしたら、何度かキッドとして接触した事があったから、蘭は快斗の事をキッドだと察しているのだろうかと自分に問う。笑いながら話してくれる事を信じて待っていると快斗に告げるその言葉は、少なからず快斗の事も言っているのか。

彼女の優しげな瞳に、思わず何もかも話したくなる衝動を覚える。コナンだった時に何度も何度も蘭に告げるか告げまいか迷っていた新一の気持ちが良く理解出来た。

自分の気持ちに決着がついたら、いつか話しても良いかもしれない。まずは青子に謝って、また掃除用のモップで追いかけて回されて、彼がコナンだった時に新一に変装したりして悪かったと蘭に頭を下げて、蹴りの二ゝ三発は覚悟して…。

「サンキュ」

「…うん」

そつと手を離し、二人は笑みを交わした。大切な青子の側に居てくれる蘭へ、何だかんだ言っても新一と行動を共にしている快斗へ。

今はただ精一杯の感謝を込めて、二人は微笑んだ。



翌朝、四人一緒に朝食をとり支度を調べて荷物を持って旅館を出ると、真冬の朝の澄んだ空気が余りにも美しい青空を輝かせていた。青子は思いつき胸に吸い込んだ息を「ハァー」とはき出すと、まるで白い吐息が煙のように消えていく。頬を掠める冷たい冷氣だったが、地面を照らす暖かな太陽の光がとても眩しかった。

「遅せーぞ青子、何やってんだ」

「：女の子は支度に時間がかかるんです！そんな少ない荷物の快斗と一緒にしないでクダサイ！」

べーっと舌を出して、まだ怒っていると言う事をアピールしているつもりなのだろうが、そんな子供みたいな仕草ですら快斗にとっては気恥ずかしくなる位に可愛らしかった。

「何が女の子だよ。蘭ちゃんとはとくに支度も済んで、車に乗って工藤と帰ったよ」

「えっ…！？嘘っ、青子そんなに時間掛かった！？って、工藤クンと蘭ちゃん帰っちゃったの！？」

「そ。東の名探偵は事件が恋しくて先に帰りやがったんだよ。蘭ちゃんと二人っきりでな」

「そんなー！」

『ねえ黒羽くん、本当に電車で帰るの？』

『あー。工藤が“いい加減蘭ちゃんと二人っきりにさせろ”って煩いんだよ』

先に旅館から出て来た二人は、早々に車に荷物を仕舞うとそのまま運転席と助手席に乗り込んだ。蘭は何も聞かされていなかったのだが、新一は昨夜快斗から聞いていたのだ。青子と二人で電車で帰ると勝手に一人で決めた事を。

『駅まで乗せてってやるけど…？お前はいつでもいいとして、青子ちゃんに黙ったまま帰るのも申し訳ないし、駅まで結構かかるぜ？』

『遠慮しとくよ、適当にバスでも使って行くから気にするな。昔は良く行き当たりばったりで適当に遠出して迷子になるのがオレらだったし』

『そっか。まあ頑張れよ』

『オメーもな』

最後に拳と拳を合わせるように挨拶を交わすと、新一は車のキーを回した。運転席から後退すると、車がゆっくり動き出す。カーウインドウを開けて蘭が手を振っていた、駐車場を出る際に新一が一度だけハザードランプを点滅させた。

「つーわけだ、オレらはのんびり帰ろうぜ」

新一も蘭も付き合っているワケじゃなかったが、両思いな事は鈍感な青子でも解っている。だからあえて二人つきりにしてやったんだよオレが気を利かせて！と適当に説明してみせた。

蘭とは良く恋愛話に花を咲かせている仲だから、流石の青子も納得して見せた様子だった。快斗への意地っ張りな怒りよりも、友人の幸せの方が先決だった。

「…うん」

「何だよ、来る時はオレと旅行するの久しぶりだって喜んでたくせに」

「べっ…別に喜んでなんかないよ！ただ、ちょっと…」

「オレは楽しかったけどな。青子と一緒に」

空耳かと錯覚する位に意外な快斗の言葉に思わず頬を真っ赤に染め上げるが、当の本人はそっぽを向いて後頭部を指でポリポリと掻いていた。

「か、快斗…？」

「飯も美味かったし露天風呂も気持ちよかったし、蘭ちゃんの浴衣姿も堪能出来たし」

「なっ!!」

快斗が照れ隠しに付け足した最後の言葉に、青子は怒って自分のバッグを持ち上げて：

「またそうやってすぐ変な事を考えるんだから快斗はぁー!!」

「うわっ、馬鹿やめろって、冗談だっつーの、おおいしい!」

「待ちなさいいー!!」

走り出した快斗を追いかけろべく、青子はいつもの様に血相を変えて走り出した。まるでいつもと何も変わらない二人だったが、快斗もまだまだこうして青子に追いかけるのが楽しくてしょうがないと言った感じだった。

二人の気持ちは、きつと同じだから。

今はもう少しだけこの“幼馴染み”と言う距離感を味わっていたい。

好きな気持ちは、変わらないから…。

のんびりと、流れる景色を眺めていた。

隣には小さな寝息を立てて眠る愛しい幼馴染みが、昔と変わらず自分の側に居る。

もうすぐ、あの戦いが終わって一年経とうとしていた。

激動の日々を潜り抜け、愛しい者の待つ平穏な日々は無事戻れてからも、二人はそれぞれ別々に忙しい毎を送っていた。

こんな風に遠くの山々の景色を眺め昔を懐かしむ事が出来る等、あの頃は考えても居なかった。そりゃ何があるうと生き延びるとは心に決めていたが、彼らの戦いの相手は一般人とはかけ離れた連中だったのだ。

極ありふれた平穏な日々からこそ、最高の幸せがあると改めて思い知る。

諦めずに居られた自分を支えていたのは、他ならぬ愛おしい彼女の存在だった。

恥ずかしくてなかなか口には出せないけれど、心の中に大きく存在している。

いつか帰る場所だと言い聞かせていた。

空に輝く一等星の様に、闇を駆けずり回っていた自分にもたられれていた強い光り。

“ 無くすワケには行かないからな ”

素直になる事に難しさを感じつつも、二人は溜息混じりに苦笑した。

それぞれの大切な、愛おしい幼馴染みの隣で…。

おまけ“ドッペルゲンガーに御注意を”(前書き)

本編とは直接関係のある“おまけ”ではありませんが、新一と快斗のコメディ風味のおまけ短編だと思って頂けると幸いです。

おまけ “ドッペルゲンガーに御注意を”

約束の時間を大幅に過ぎてしまっても、本気で怒る事はない幼馴染みにどれだけ救われているか。ここ最近、頻繁に起こる凶悪事件：当然彼は警視庁の目暮警部に呼ばれてひっきりなしに現場と言う現場を連れ回されていた。

殺人犯、強盗犯は一分一秒も野放しにはしておけない。彼は現場に着くと約束の事も忘れて事件に没頭した。去年のクリスマスに復活した高校生探偵・工藤新一は、再び迷宮なしの名探偵としてマスコミや新聞にこぞって取り上げられていた。

幼馴染みの毛利蘭との“外食”の約束を思い出したのは全てが解決したその直後だった。後の事は目暮警部に任せて彼は車を走らせたのだが、約束の時間を過ぎていと言うのに蘭からの連絡が携帯に來ない事に一抹の不安を抱えていた。

けれど、新一は：蘭が自分の事を理解してくれている事を知っていた。知った上で、新一が約束を忘れているのではなく、事件を優先しているのだと理解しているのだ。

まだまだ関係は“幼馴染み”から発展しそうになかったけれど、こうして二人で出かける事が増えて、徐々に距離が縮まりつつあると確信していた。蘭の気持ちは、溢れかえる程に解っている。自分がケジメをつける為に、タイミングを見計らっている段階だった。蘭を探偵事務所に送り届けると、車を走らせる新一が角を曲がるまで家に入らず、ずっと見送っている。まだ高校三年生とはいえ、蘭はどんどん綺麗になっていった。運転席から時折横目で確認する彼女の事が：空席になった途端に切なく思い返される。

走り慣れた住宅街を抜けて自宅に着き、ガレージに車を仕舞うと

ハンドルに額を預けて溜息をついた。お互いの気持ちは決まっている筈なのに、いざ想いを伝えるとなると踏ん切りが付かない。幼馴染みだった期間が長すぎたのだろうか：なんて都合の良い言い訳を思い付くが、ぶんぶん頭を振って否定した。

とりあえず車から降り、施錠し、一人で住む我が家へと帰宅した。

しかし玄関でスリッパに足を突っ込む前に、ふと何かの匂いが鼻についた。明らかに食べ物の匂いだったが何なのかまでは特定出来ない。両親は相変わらず海外を飛び回っているし、阿笠博士でも来たのだろうかと思いつながらそのまま廊下の電気を付けてリビングへ向かった。

すると灯りの付いていない薄暗いリビングから人の気配を感じ取った。玄関を開けて入ってきた自分に動じない辺り、空き巣の類ではないだろうと踏んでいたが：それにしても一体誰が？と不思議に思い、新一はリビングへ入ると入り口の電気のスイッチをカチっとつけた。

「……………おい……………」

両親の趣味で集められた、かなり高価な調度品や家具でシックに仕上がっている洋館・工藤邸のリビングだったが、イタリア製のソファには同柄のクッションを抱きかかえて学ラン姿で寝転がる友人：そしてTVとの間にあるローテーブルには空のコンビニ弁当と空のペットボトル、そして食い散らかされたお菓子のゴミが置いてあった。

しかし玄関には鍵が掛かっていた。まあその友人には所詮鍵など意味もない物だったが、流石に靴はどうしたのかと思いきや、リビングの窓を見遣ると彼のスニーカーがそこに転がっていた。

（今度、警部から手錠一個借りて置くか）

新一が帰宅した事に全く気が付いて居ないのか、音の無いリビングには彼の寝息が規則正しく聞こえていた。この男も一応自分と同じくして有名人である事には代わりはないわけで、恐らく本気で疲れて眠っているのだろうと安易に想像出来た。が…

だからといって、このまま大人しく寝かせておいてやる間柄でもない。

ポケットから赤い蝶ネクタイを取り出すと、裏に着いているダイヤルをぐりぐりと回す。

去年散々お世話になった彼の必須アイテムだ。

そして番号を合わせると、それを口元へ持って行き、ボリウムを最大にしてソファに寝転がる男・黒羽快斗の耳元で思いつき息を吸い込んだ。

「キッドオオオオオ！確保だあああああああ！」

「うわああああ〜〜！」

二人の良く知る警視庁捜査二課の中森警部の声音を使って叫び散らす。

すると期待以上の反応を見せて、快斗は絶叫しながら飛び上がった。

クッションを放り投げて驚愕する快斗を見て、新一は思わず笑いが込み上げた。宝石泥棒に関しては右に出る物が居なかった完全無欠の大怪盗と言われたこの男も、流石に寝込みは弱いらしい。

しかし、ニヤニヤと笑っている新一を見て状況を把握した快斗も黙っては居ない。

「てっ：てめえ！びつくりすんじゃねーか！！」

「当たり前だろ、驚かせる為にやったんだ」

「性格悪りーぞ！」

「家主の留守中に無断で転がり込んで、食い散らかしているお前が言える台詞か？」

「良いじゃねーか別にオメーんちの冷蔵庫の食材に手を付けたワケじゃねーんだから！」

「バーロ、此処に居るだけで立派な住居侵入罪だ」

そう吐き捨てると新一はリビングの電気を付け、そして真っ直ぐキッチンへ向かった。手を洗って冷蔵庫を開け、残り少ないミネラルウォーターをペットボトルごと口を付けて飲み干した。

「何、機嫌悪りーじゃん。今日デートだったんじゃねーの？」

「お前まさかウチに盗聴器とか仕掛けたりしてないだろうな」

「んなワケねーだろ。お前と蘭ちゃんの話なんか筒抜けだったっの」

「…ああ、そう言やそうだったな」

ぼさぼさの髪を掻きながら、目一杯嫌そうな顔をしていた。二人の幼馴染みの少女はとても仲が良い。それこそ新一と快斗がお互いに「奴に知られたくない」と思っている話までしていそうで手に負えない。だから新一と蘭が今日一緒に出かけていた事等、まるで天気情報のように当たり前に入ってくるのだ。

「それで、お前は一体何しに来たんだ」

「用事が無きゃ来ちゃいけねーのかよ」

「“不法侵入”してまでウチに来た理由を聞いているんだ」

まあデートだと知っていれば、遊びに来ているだなんて野暮な連絡は寄越す筈がない。けれど留守だと知っていて家に上がり込んで

居た理由を新一は訊いていた。用事が無くてわざわざ来る程、二人の仲が良いと言う事はないのだ。

有名人だから逃げてきたと言う事でもなかろう…。人を欺く位ワケないのだから、この男は。

「まあ、ちよつと困った事になつてな」

「珍しいな。それで俺を頼つて来たのか？…明日は台風だな」

「真面目に聞けよ」

「解つたよ、何だ、話せよ聞いてやるから」

いつになく快斗の様子がおかしかったので、新一はからかうのを止めてそのままリビングへと戻った。帰宅した時にはテーブルの上に所狭しとゴミが乗っていたというのに、新一が戻ると綺麗に片付けられていた。…とは言つても、コンビニのビニール袋に全部詰め込んだだけの様子だった。

「実は」

快斗が寝そべっていたソファの横、新一お気に入りの一人掛けのソファに腰を沈めると、言い辛そうに隣のソファに腰掛ける快斗が困惑じみた表情で話し出した。

「TVの企画で“怪盗キッドの犯行劇”マジックショー」
「って言う話が来てるんだ、オレに」

「ぶっ…マジか」

「勿論どつきりみたいな感じで、最後はちゃんと“キッドは偽物でした”って正体をバラすらしいんだけど、オレのマジックを見たTV局のお偉いさんが、すげー熱心にオレを口説きに来たんだよ」

稀代のマジシャンの血を受け継いだ快斗は、今や“月下の奇術師

”は引退。故ジェームズ・ホッパー創立の奇術団に所属している日本を代表するマジシャンの一人となっていた。

今年の夏に一人でショーを披露し、それ以来目まぐるしいスケジュールをこなし、コアな奇術ファンから子供まで、あらゆる世代を虜にしていた。当然、来月末にはまた大舞台が待っている。

そんな快斗の元へやって来たTV出演の依頼がなんと、怪盗キッドを演じてくれと言うのだから流石の快斗も驚きを隠せない様子だった。

「つかそれ、最後に正体バラすっていうのはただの口約束で、お前をキッドに仕立て上げて視聴率を取ろうっていう魂胆が俺には見えるんだが…」

「縁起でもねー事を言うな…」

あれだけ世間を騒がせた怪盗が、ぱったりとその姿を現さなくなった事で、キッドはただの怪盗じゃなかったのではないかと彼の事を未だに調べているファンも少なくはない。となれば当然、マスコミやTV局にも色々と問い合わせが来ている筈だ。

しかし、怪盗を引退した快斗は今や普通の高校生に戻り、父が手にしたマジシャンの最高峰を目指して頑張っているのだ。

「別に嫌なら断ればいいじゃねーか。仕事の一つや二つ拒否したところで、お前の人気に支障は出ないだろう。適当な言い訳つけて“出来ません”ってハッキリ言えばいいじゃねーか」

「それが…」

ふいに視線を泳がせて、明後日の方向を見ている快斗はどうも歯切れが悪い。新一の言いたい事も当然解っている筈だし、快斗だってその性格を考えればやりたくない仕事は遠慮無く断りそうな感じ

がするというのは。

「ああ解った」

「え…」

「お前さては“挑発”に乗せられたな」
「ギクッ」

あからさまに顔色を変えている。

新一は自分がまだコナンの姿だった時に幾度となく怪盗と遭り合ってきた。だから快斗の性格はお見通しっちゃお見通しなのだ。

目当ての宝石ではないと知っていて、挑戦状を叩き付けられれば“罠の張られた舞台”と知っていてものこのこやってくる。そして人を嘲笑うかの様に宝石を搔っ攫っていく。

売られた喧嘩は買う主義なのは新一も同じだが、快斗は基本挑発に弱い。

「どうせ“流石の黒羽さんでも怪盗キッドは無理ですよねぇ」と言われて、頭に來てはいはい返事したんだろう、お前の事だからな」

返事に渋っていた快斗を落としたその口説き文句は、まさに新一が推理した通り。

単純というか子供というか…。

「別にキッドになって宝石盗めって言われたワケじゃないんだろう？ どうせいつも“キッドもどき”な衣装で舞台立ってんだから、ちよっとシルクハットとモノクルつけてマジックの一つや二つやって見せてやればいいじゃねーか」

「簡単に言うなよ…」

「地が出そうになるってか」

「…そうじゃねー」

快斗はソファ横に投げ捨ててあった自分の鞆を掴むと、その中からA4サイズの手紙を取り出した。渋々それを新一に手渡す。何だっというんだ？と新一はその数枚の手紙を受け取って絶句した。

「ちょ…」

「…な？」

受け取った手紙の表紙には拡大文字で“怪盗キッドVS高校生探偵(仮)”と書かれていた。しかもその少し下にある余白には、候補の高校生探偵の名が遠慮無く記されている。

そう…工藤新一の名が…。

「なんだこれ！俺は聞いてないぞ！？」

何故快斗に先に話が来て俺の所には連絡が来ないんだ！？と驚いて快斗を見るが、その快斗が顎でリビングの家電を指している。キョトンとして指された方向を見ると、彼の家の電話の留守録ボタンが規則正しく点滅している様子だった。

「…マジかよ」

慌てて立ち上がり留守電を再生した。入っていた件数は一件のみ。最近の携帯が普及してからは、家の電話番号や住所を人に教える事は滅多になくなってしまったから、あまり新一宛の電話が掛かってくる事は無いのだ。

快斗が言っていた通り、TV局の者だという人物から後日お時間

を頂けないでしょうかと言う出演依頼の電話だった。恐らく快斗がこの家に来てリビングに上がっていた時に電話が鳴り、その留守電を聞いたのだろう。

「な？頼むよ工藤、この仕事断ってくれねー？お前がダメになれば高校生探偵なんてそうそう居ないんだし、まさか大阪まで撮影に行く何て事にはならないだろうからさ」

「大阪って、服部の事か」

「そうなれば流石に無理だって断れるけど。…な、だから頼む！この通りだ。事件で忙しいとか適当に理由つけて断ってくれ！」

新一に必死に手を合わせて頭を下げる快斗。

しかし、しつくり来ない。

何故自分にわざわざ頭を下げるのか。

「オメー…」

「な、何…」

「自分が“出来ません”って断りたくないからって、俺に仕向けてねーか？」

ポーカーフェイスは何処へやら。

新一の言葉に、快斗も思わず息を飲んだ。

ただでさえ普段、半分はキッドの衣装でショーを魅せる快斗だ、それを怪盗のまんまの格好で舞台上に上がればまず間違いなく地が出るに決まっている。しかもTV局が用意するステージは、書類のタイルを見ればもろバレだ。

怪盗キッドVS高校生探偵…怪盗の格好で、怪盗として手品を魅

せて、怪盗として宝石を盗み出す犯行劇をしろというのだ。マジックショー

いくら演じきる自信があっても、自ら正体をバラすような真似が出来ない。

しかし挑発に弱い快斗は返事をしてしまった、いや、押し切られてしまったと言う方が正しいのかも知れない。けれどその主旨を聞き、自分を捕まえようとする好敵手が居なければ成立しない番組なのだ。と言う事は、自分は引き受けたけど相手が断ったとなれば、うまく破談に持ち込める寸法なのだ。

と言う…快斗の浅知恵は、見事探偵に見切られてしまった。

「…頼むよ、オレとお前の仲じゃん…」

「そうだな。元怪盗と、現探偵の仲だな」

新一はニヤッと笑うと、面白くなりそうだと呟いて企画書を快斗に返した。

そんな彼の笑みを見て、快斗は蒼白した。

「それにしても馬鹿だなお前。不法侵入ついでに、俺の声音使って電話に出て断ちまえば良かったのによ」

「あっ、あのなあー！んな事したらお前ぶち切れるだろうが！」

「詰めが甘くなったな。そんなんじゃ元怪盗の名が泣くぜ」

「てめえ…」

いつも快斗のおちゃらけた性格に散々振り回されていた仕返しとばかりに、新一はその話を受けるつもりで居た。所詮ただのTVの

企画、本物の犯罪を犯そうと言うワケではないのだ。

新一や視聴者にとってしてみれば、キッドを装ったマジシャンが出るだけの話。本人以外の誰も困る物ではないのだ。

「わーったよ！お前がそのつもりなら、受けて立ってやらあー！」

「せいぜい正体がバレないように頑張れよ」

「お前もな、たかがマジシャン一人捕まえられない探偵なんて噂立たれても知らねーからな！」

「肝に銘じておくれ、偽キッド」

子供染みた素振りで舌を出すと、快斗は鞆を持って最後に新一を一睨みした。散々頭を下げて頼んだプライドがへし折られ、余計に火が付いたようだ。

じゃーなっ！とわざわざ煙幕弾を発弾させて、瞬時にリビングから消失した。あいつ、いつでも何処でもあんなの仕込んでいるのかよと苦笑しながら、リビングの窓が少しだけ開いているのを確認する。

快斗が居なくなり、急に静まりかえったせいか、庭の木々が夜風に揺れる微かな音でさえ新一の耳に届いてきた。そっと窓に近付くと、そこには既に快斗の気配はなくなっていた。

居なくなっただけから…と言うワケではなかったが、新一はぼつりと呟いた。

「…懐かしいな。お前を追って居た頃が、随分昔に思えるよ…」

彼のスニーカーもなくなっていた。律儀な事に、彼が食い散らかしたコンビニ弁当やお菓子のゴミも持って帰った様だ。

快斗が本当に嫌がっているのを解っていたから、出演依頼を断っ

てやるくらい本当はどうって事無い話だったのだ。けれど、新一は心の何処かで、この企画に興味があったのかも知れない。

彼が信条とするシャーロックホームズも、嘗ての宿敵の事を嫌っていたワケではなかった。新一もそうだ、ホームズと同じ位、あのモリアーティ教授の事も気に入っていたのだ。

「退屈させんなよ」

星空にぽっかり浮かぶ月を見て、白い翼を持つ怪盗を必死になつて追つて居た頃を思い出す。アイツが本気を出して怪盗キッドを演じれば、それは宛ら二人の過去の再演となる。

新一はそれが楽しみなのだ。

：キッドだった頃の快斗とは違う、マジシャン“黒羽快斗”として演じるキッドの事が。

「今度こそ、絶対捕まえてやるからな」

新一はそつと窓を閉めた。

気を引き締めていかなければいけない、正体がバレようが何しようがお構いなしに仕掛けてくる可能性もあるのだ。あいつの性格を考えれば、もしかしたら黒羽快斗のマジックショーを本物の“怪盗キッド”に扮して奪いにやってくるかもしれないのだ。

そうなればもう、新一にも“どっちが本物”なのか解らない。気障で負けず嫌いで、とにかく常識を逸脱した真似を好む快斗だ。きつと何か策を立ててくるだろう。

久々にワクワクする気持ちを抑え、新一は口の端から笑みを零した。

まさか、再び対決出来るとは思わなかったから尚更だ。

新一はそのまま暫く月を見上げ、怪盗キッドを追って居た頃を思い返していた。

おまけ“ドッペルゲンガーに御注意を”（後書き）

長々とお付き合い頂き有り難う御座いました。

現在続きを書いておりますが（現時点ではまだブログでも公開してませんが）書き終わり次第またUPしたいと思います。

最後までお読み頂き有り難う御座いました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7341/>

THE LAST WIZARD -アスタリスク-

2010年10月8日14時14分発行